

均衡理論の適用による 母一子の態度に関する研究

(第1報告)

古 畑 和 孝
鈴 木 百 合 子
松 野 (東) 尚 子
武岡 (田代) 千枝子
新 井 弘 子

I 序

ここに報告しようとする研究は、昭和41・42年度の文部省科学研究費による総合研究「家族関係と人格形成」(代表研究者・依田新)の一環をなすものとして行なわれた分担研究課題の一部である。

上記課題に関する研究班が組織され、筆者らもまた、分担研究者ないしは研究協力者として、それへの参加が求められた際、当初期待された役割は、「家族関係と密接な関連をもつ行動特性の発達」に関する分班の一部として研究を遂行することであった。たとえば、子どもの側におけるひとつの典型的な社会的行動の形態としての依存性だとか、攻撃性だとか、あるいは筆者らの中の一部の者が手がけてきた対人的相互作用の主要形態と考えられる協同性とか競争性とかを取り上げて、それらを規定する、ないしはそれらに影響を及ぼすであろう親の側の養育態度や意識とか、あるいはしつけの実践との関連性を、何らかの手法を導入して解明していくことに寄与することであった。そしてそのような研究課題は、まさに「家族関係と人格形成」の問題に取り組むにあたり、是非とも追究されるべき課題

である。その間の事情は、たとえば、Becker (1964) による、かなり広範な展望「親のしつけとその諸結果」(“Consequences of parental discipline”) をひもといてみても、明らかに看取することができよう。あるいはまた、比較的新しく編纂された Medinnus (1967) による「親子関係の心理学論文集」(“Readings in the psychology of parent-child relations”) を一瞥するならば、その構成が、まず方法論的問題の検討によって始まり、次いで親の側の態度や行動に関する変数、子どものある種の行動次元についての親の側の規定因、子の親に対する知覚・認知、などの問題を順次に取り上げ、最後にこの種の問題と重要なかかわり合いを持つ、社会的文化的要因に関する一連の研究が提示されるという体裁になっている。そして今少しく内容に立ち入って検討を試みても、結局はやはり、親の側の、子に影響を及ぼすと考えられる変数 (M. R. Yarrow (1963) の表現によれば、“the presumed antecedent variables”) と、その結果として生起すると考えられる子どもの側の行動特性特徴に関する変数 (同じく、“the presumed consequent variables”) との関係性を明らかにしようとする研究は極めて多く、それはまた、それらの研究問題の関心度の高さ、重要さをたしかに反映しているものでもあろう。筆者らは、上記のような研究や、つとにわが国で公刊されている依田新(編)「家族の心理」(1958) その他を手がかりに、焦点をしぼっていく過程において、家族関係、わけても、親子関係という最も基本的な対人関係の形成過程や、そしてまた、ある一定の時点での、その関係の構造、あるいはその構造の安定性や変化可能性などにもまた、思い至らざるを得なかった。

ところで、基本的対人関係に関する考究を進めるのにあたって、参考になると思われる枠組に、ここ20年間ほどの間に順次に唱導されるにいたった、個人内認知体系の中で、ならびに対人的認知体系の中で、「均衡理論」(Zajonc (1960) によるならば、“consistency theory”, また Gage, Runkel ら (1960), (1963) によるならば “equilibrium theory”) といわれるものがある。Heider (1946), (1958) における “balance”,

Newcomb (1953), (1959) における “strain toward symmetry”, Osgood と Tannenbaum (1955), (1960) における “congruity”, そして Festinger (1957) における “dissonance” などの概念は、それらの代表的なものとしてつとに広く知られている。今そのそれぞれの理論の異同、共通性・特異性などに関する包括的考察を試みようとするものではないが、(詳しくは、たとえば Zajonc (1960), (1968) や、R. Brown (1962) などを参考とされたい) もとよりこれらは同一の事柄・事象を、ただ彼らの独自の用語で述べているのではない。その扱う対象の範囲も、主として、ある人のある対象ならびにその対象に対する源泉の態度のようなかたちで態度変化の方向その程度などを問題にしようとするもの (たとえば、Osgood ら) から、2つの認知要素を媒介としての人の協和・不協和を扱おうとする、適用範囲のかなり広汎なもの (Festinger) までもある。あるいは、主として、質的な取り扱いをしているものも、数量化を志しているものもある。さらにはまた、主として、個人内の認知体系の中でおさえようとするものも (たとえば、Heider), 主として対人的相互作用の場で考えているもの (たとえば、Newcomb) もある。しかしそれらの差異にもかかわらず、これらの枠組が「均衡理論」として纏めて論じられることがあるのは何故であろうか。それは、まず第1に、自分にとって意味のある対象たる他者 (O) との関係において、知覚する主体たる自分 (P) が、PにとってもOにとっても共通な、ある特定の対象 (以下Xとする) (それはごく限定されたものであることもあろうし、またかなり包括的なものであることもあろう。また、具体的な人・事物・事象のこともあれば、抽象的なものであってもよい。) に対してどのような態度をもち、またどのような態度をもつと認知するかに関するものである。次に、ここに単純化したかたちで述べた P-O-X の体系は、一定のしかたで均衡を保とうとする傾向があり、そのような均衡は維持されている限り、一般に快適と感ぜられ、持続される傾向がある。これに対して、何らかの契機で不均衡の状態に陥ると、(それは、たとえば、認知対象に対する従来のそれとは

異った新たな情報を得ることによって、その認知対象に関する態度が変化する結果として、あるいはまた、認知対象それ自体の属性が変化し、それに伴って、それに対する態度が変容することによって、その他基本的に幾多の契機が考えられるが)、そのような状態は一般に不快と感じられ、したがって、一定の仕方で均衡を回復しようとする力ないし傾向が生起する。それは、一般にOないしXに対する態度を変えることにより、あるいはまた、事態を再定義したりすることにより、さらには、P-O-Xの体系の中の下位をなす部分を細分化すること (“compartmentalizing”) などによって達成される。もちろん、不均衡のままであるというのも可能なひとつのあり方ではある。しかしながら、これは一般に採られる機制ではない。表現する術語に関してはもとよりのこと、その細部に至っては必ずしも同一のことがらを取り扱っているのではないにもせよ、以上略述したような点に関しては、これらの主要な構想を定立した人びとの間に共通性を看とることができよう。それだからこそ、「均衡理論」として論じられることがあるものといえよう。

しかしながらこのような原理は、いついかなる条件の下においても妥当する普遍的なものではない。Zajonc (1960) が指摘しているように、それはあくまでも、*ceteris paribus* (293頁) という条件下において、はじめて人の行動や態度を説明することが可能なのであり、そして、他のどのような条件こそが恒常に保たれるべきであるのか、また、そのような条件は、均衡との関係において、いかに重要であり意義があるかについては、改めて問われなければならないであろう。

さて筆者らは、はじめ家族関係と密接な関連をもつと思われる、子どもの側の「行動」特性を考えようとしたのであった。しかし、そのような子どもの行動の背景には、子ども自身の行動を向ける「対象」に対する態度がある筈であり、そして子どものそのような態度は、まさに子どもと密接な関係にある親の、子に対する一般的ないしは特殊的感情、その対象に対する態度と、当然深くかかわりあっていることが想定される。それ故に、

子どもの行動特性それ自体を取り上げていくのはもとより重要なことではあるが、そのひとつ前の段階において、行動を規定するひとつの重要な要因である態度に焦点を合わせ、しかもその態度をただ一般的にではなく、具体的な特定の対象に対する態度として取り上げ、それらの対象をめぐっての、親子の態度の体系および態度についての認知をみ、その間の類似度・差異の程度を明らかにしていくこともまた、必要な意義深いことと思われる。その場合、親もしくは子のいずれかによってのみ、重要な中心的な、自らの行動・目標と関連性のある対象というのでは、取り上げてもさして意味がないであろう。親子いずれにとっても重要な中心的と目される対象でなくてはならないのは当然である。さらに、何らかの仕方によって、親子間の相互的魅力 (interpersonal attraction) を具体的に、操作的な手続きで明らかにしていくことが必要であろう。

このようにみえてくるならば、対人関係を理解する基本的枠組のひとつとしての均衡理論をモデルとして取り上げ、それを、P-O-X間の体系一般としてではなく、かえって極めて具体的な親と子との、両者双方にとって重要と認知される対象に対する態度をめぐっての関係を探っていくことができるのではなからうか。また、果たして親子という特異な典型的な関係に、このような枠組を適用することは可能であるのか、またどのような制約が考えられるべきであるのか。それらの点も、あわせて明らかにできないであろうか。加えて、もしもこのような枠組が親子関係理解に適用可能であるとするならば、それはただ単にある一定の時点における親子間の関係の静的 (static) な理解にとどまらずして、ある一定の操作を導入することによって (たとえば子どもに対し、親は子どもの行動をどのようにみているかということに関するフィードバックを子どもに与えた場合と、与えない場合とを設け、その両群を比較することにより、) 親—子—X間の体系に、ある種の不均衡を生ぜしめ、そのことを通じて、子どもの態度を、したがってまた行動を変容させることへと導くひとつの手がかりが与えられるのではなからうか。そのような、いわば、もっと力動的 (dynamic)

な側面に迫ることも可能なのではなからうか。

ところでひとくちに親といっても、それは果たして、両親か、父親か、あるいは母親を意味するのか。現実には、両親が複合したかたちで、子どもに影響を及ぼしているのではあろう。しかしながら、ここでは多様な要因をなるべく統制する意味もあり、かつ日常子どもの具体的行動をより多く直接観察しているということもあって、親一般としてではなく、母一子のそれに限定して、取り上げるようにした。

大要以上のような観点から、筆者らは、結局、表題のような、「均衡理論の適用による母一子の態度に関する研究」をおこなうに至ったのである。以下に報告するのは、その第1報告である。

II 目 的

序において極く簡略な展望を試みた均衡理論の中でも、ことに对人的相互作用をしている場に主たる焦点をおいているのは、Newcomb のそれである。現在は彼もまた P-O-X という表現をとっているが（詳しくは、Newcomb *et al.* (1965) をみられたい）その構想をはじめて公刊した際 (Newcomb (1953)) A-B-X system という表現をとっていたのは、知覚している主体 (P) と知覚される対象 (O) という区別をするのではなく、ただ単に相互作用をしている二者を区別するという意味においてであったと解せられる。(Newcomb *et al.* (1965), 159頁の脚注を参照されたい。)

筆者らを取り上げようとする対象は、まさにこのように相互作用をしている母一子である。その故もあり、筆者らは、均衡理論の中、主として Newcomb による枠組を利用することに決した。

そして具体的には、次のような目的をもって、研究計画を立案、実施したのである。

1) (i) まず、母一子にとって、共通して関心のある、重要と認知される対象を選出すること。(ii) ついで、これらの対象に対する母一子の態度の類似度を求め、それに関する4指標を下記の手続きで算出すること。

(iii) それとともに、母一子の親近感情を測定する尺度を構成すること、
(iv) 以上を基にして母子の親近感情と、これらの指標との間の関係を、
均衡理論に基づく仮説にしたがって検討すること。なおこの際、対象は子ども
の行動に関連のあるものに限定することとした。

2) 母親の、現実の子どもの行動、および理想の子どもの行動についての
の評定結果を、子どもに対してフィードバックをおこなった場合、そうし
なかった場合に比して、一定期間後に、母親ならびに子どもの双方にとっ
て、それが母一子の態度変容に対してどのような効果があるかを、均衡理
論に基づいて仮説を樹て、その検証を試みること。

3) 上記1および2の研究目的を実施に移す諸過程において得られる各
種の資料の吟味・分析に基づいて、筆者らがここで取り上げようとするよ
うなかたちでの母一子関係に関して、均衡理論の適用を試みることの意義、
実際の適用可能性およびその限界などを、具体的に検討すること。

本報告においては、目的1に関する諸結果および、3に関する結果の一
部を述べることにする。

III 方法および手続き

上記の研究目的を実施にうつすためには、いくつかの段階を経なければ
ならなかった。ここには、方法の大要を、原則として、継時的な順にした
がって述べていく。

1) 被験者：母一子関係とひとくちにいても、それは極めて多様なも
のがありうる。後述のような質問紙法による設問の意味を十分に解し得、
適切な応答を選択し得、かつまた母親が自分の行動についてどのように評
価しているかを正確に認知し得る程度の認知的成熟段階に達している子ど
もであること、また発達段階による変動、性差による変動などもチェッ
クし得ることなどの理由から、当初、被験者は小学校5年および中学校2
年の2年齢段階の、男・女を含むものならびに、その母親とされた。しか
し本調査においては、中間調査の結果を参照し、発達段階・性別の要因は

統制することとし、結局、中学校 2 年女子ならびにその母親に限定された。

なお、本研究で意図するような母—子関係の様相は、基本的には、地域差や階層差によって有意に変動するとは考えなくてよいとの判断により、筆者らの一部の者の要請により、協力の得られやすかった、都内および都下数校の児童生徒およびその母親がその被験者として用いられた。

なお、調査の対象となる子どもの行動に関する領域および具体的項目選出の資料を得ることを主目的として行なわれた予備調査では、都内・都下の公立小学校 5 年，中学校 2 年の男女生徒合計約 170 名およびその母親が被験者となった。次いで、作成された問題の設問・応答形式表現などの適切さ，項目の理解度などをチェックする目的で行なわれた中間調査では，前者とは別の都内・都下の小学 5 年，中学 2 年男女生徒各約 50 名およびその母親が用いられた。

さらに、一連の実験的本調査では、都内私立女子中学 2 年生 2 学級計 98 名およびその母親が選ばれた。

調査にあたって、その段階においても、子どもの方は各校とも、校長・担任・関係教諭の諒承を得、一定の説明の後、学校で記入を求め、母親に対しては、いずれの段階でも、印刷した依頼状を附して、家庭で記入を求め、学級担任を通じ回収するようにした。

2) 調査の対象となる子どもの行動に関する態度領域ならびに具体的項目作成のために必要な情報を得ることを主目的とした予備調査項目の作成・実施：筆者らは、母親ならびに子どもがともに日常関心をもつ、重要な態度の対象を、子どもの具体的行動に関連する範囲内に限定して見出そうとした。そのような対象領域を先験的に恣意的に規定することも可能ではあろう。しかしながら、そのような対象 X は、母子のいずれにとっても関連の深く、かつ重要と認知されるものであり、母—子—X 間の体系のなかで均衡を保とうとするようなものでなくてはならない。これは目的 1 の (i) に対応する。

さらに、そのような対象に対する母一子の態度の類似・差異をめぐって、その感情の実際の様相に関する情報を得ることもまた必要である。母一子の年齢・立場・役割などの相違の故に、態度・意見の類似・差異といっても、子の側からのそれと、母側からのそれとの間には、質的にも異った面のあることも想定することができる。このことは、筆者らの上述の目的に掲げた均衡理論の適用可能性検討のためにも、その一資料たりうることを示すものといえよう。

以上のような観点から、筆者らは、母一子のそれぞれに対し、下記のような8問から成る自由記述形式の質問紙を作成、既述の手続きにしたがって、それぞれ配布し記入を求めた。

なお詳しくは、別稿を参照されたい。(本稿の末尾に記載)

予備調査項目一覧

I 子どもに対し：

子どものもっている問題について調査するために、皆さんのふだんの生活についてお聞きしたいと思います。調査の結果はだれにも見せませんから、ありのままを答えて下さい。答はできるだけくわしく、じっさいのようすがよくわかるように、具体的に書いて下さい。

- (1) あなたは最近どんなことに関心がありますか。学校のこと、家のこと、友達のこと、その他どんなことでもかまいませんから、いくつでも思いつくまま、くわしく書いて下さい。
- (2) その中で、今あなたがもっとも重大な問題にしているのはどんなことですか。
- (3) あなたはふだんおかあさんとどんなことについて話しあいますか。
- (4) あなたはおかあさんと話していて、おかあさんと感じ方、考え方が似ていたり、意見がよくあうと思ったことがあるでしょう。それはどんな場合、どういうことについてでしょうか。また、その時どんな気持ちがしましたか。その時のことを思い出して、ありのままを書いて下さい。
- (5) あなたはおかあさんと話していて、おかあさんと感じ方、考え方がくいちがっていたり、意見が合わないのに気づいたことがあるでしょう。それはどんな場合、どういうことについてでしょうか。また、その時、どんな気持ちがしましたか。その時のことを思い出してありのままを書いて下さい。
- (6) あなたは、ふだんどんなことで、おかあさんとけんかをしますか。けんかをし

たときのことを思い出して、何が原因か、また、どういようすだったか、また、どういようふうに仲直りしたかなど、できるだけ具体的に書いて下さい。

- (7) あなたは、日ごろ、おかあさんと感じかたや考え方、意見がくいちがっているので、不満に思うことがありますか。それはどんなことについてでしょうか。
- (8) あなたは、日ごろ、おかあさんと感じ方や考え方が、くいちがっているけれど、それはそれでかまわないと思うことがありますか。それはどんなことについてでしょうか。

II 母親に対し：

子どものもっている問題についての、資料を得るため、皆様の日常生活について、おかあさま方におうかがいしたいと思います。個人的結果は公表いたしませんから、ありのままお答え下さるようお願い致します。答はできるだけ詳しく、実際のありさまがわかるように、具体的にお書き下さい。ここにいうお子さんとは、あなたの(小⁵中²)のお子さんのことです。

- (1) あなたは最近どんなことに関心がありますか。家庭のこと、子どものこと、子供の学校のこと、社会のことなど、その他、どんなことでもかまいませんから、いくつでも思いつくまま、くわしく書いて下さい。
- (2) その中で、今あなたが最も重大な問題にしているのはどんなことですか。くわしく書いて下さい。
- (3) あなたは、ふだんお子さんとどんなことについて話しあいますか。
- (4) あなたはお子さんと話していて、お子さんと、感じ方、考え方、意見が似ていると思ったことがおありでしょう。それはどんな場合、どういようことについてでしょうか。また、その時、どんな気持がしましたか。その時のことを思い出してありのままを書いて下さい。
- (5) あなたはお子さんと話していて、お子さんと感じ方や考え方、意見がくい違っているのに気付いたことがおありでしょう。それはどんな場合、どういようことについてでしょうか。またその時、どんな気持がしましたか。その時のことを思い出してありのままを書いて下さい。
- (6) あなたはふだん、どんなことで、お子さんと、けんかをしますか。けんかをした時のことを思い出して、何が原因か、どういようすだったか、また、どういようふうに仲直りしたかなど、できるだけ具体的に書いて下さい。
- (7) あなたは日ごろ、お子さんと、感じ方、考え方、あるいは意見がくい違っているので不満に思うことがありますか。それは、どんなことについてでしょうか。
- (8) あなたは、日頃、お子さんと感じ方や考え方、あるいは意見がくい違っているけれど、それはそれでかまわないと思うことがありますか。それはどんなことについてでしょうか。

3) 上記予備調査結果に基づき、子どもの行動に関する態度領域の選出、各領域ごとの具体的項目の決定：詳しくはIV結果(1)に示されているように、上記予備調査の結果の分析に基づき、筆者らは、結局、勉強・兄弟姉妹・しつけ（家庭内生活習慣）・自己・友人・趣味の6領域を、母一子間において均等な重味をもつものではないまでも、共通の関心ある対象として取り上げることとした。つづいて、それらを、予備調査における母一子の回答の内容を参照しつつ、子どもの具体的行動のかたちで表現した。それを、教師（小学校・中学校を含む）、同年輩の子どもを持つ母親各数名ならびに筆者ら自身が判定者となって、その内容・表現を逐一検討した。また、学校で記入するに際しての所要時間をも顧慮し、結局、可能な約200項目中より50項目を選出した。それは次に示される通りである。これは目的1—(ii)に対応するものである。

子—I, 子—II, 母—I, 母—II に共通する項目の質問項目一覧

1. 太郎（花子）は、勉強をよくする方だ。
 2. " 勉強するのが楽しい。
 3. " 宿題をきちんとする。
 4. " 勉強するとき気が散って困る。
 5. " テストや成績のことなどはどうでもよいと思う。
 6. " 将来のためには一流校に入ることが大切だと思う。
 7. " 勉強ではひとに負けたくない。
 8. " 勉強するよりも大事なことがあると思う。
- きょうだいのある人だけ答えて下さい。(9~16)
9. 太郎（花子）は、きょうだいと仲がよい。
 10. " きょうだいなどいない方がよいと思う。
 11. " きょうだいげんかをすると、いつまでも仲直りができない。
 12. " きょうだいになら何でもうちあけて相談できる。
 13. " きょうだいよりも友達の方が好きだ。
 14. " きょうだいげんかのとき自分ばかりが叱られると思う。
 15. " きょうだいとすぐくらべられるのでいやだ。
 16. " ほかのきょうだいより損していると思う。

17. 太郎（花子）は、自分のことは自分です。
18. // 言葉づかいに気をつける。
19. // 物を大事にする方だ。
20. // 規則正しい生活をする。
21. // 礼儀正しい。
22. // 家の手伝いをよくする。
23. // 後かたづけをするのがめんどくさい。
24. // テレビを見ていたりして夜ふかしをしてしまう。
25. // やりだしたことは、最後までする。
26. // こづかいを計画的に使えない。
27. // 身体のことではなやむことがある。
28. // 自分の将来のことを考えると不安になる。
29. // 自分を他の人とすぐくらべてみる。
30. // 正しいと思うことはどんどんやる。
31. // 自分の服装、身なりが気になる。
32. // 失敗したことが気になってしかたがない。
33. // 自分をもっと立派にしたいと思う。
34. // 自分はひとよりおとっていると思う。
35. // 何でもひとにたよってしまうくせがある。
36. // 友だちがたくさんいる。
37. // 友だちはあまりいらないと思う。
38. // どうしても仲よくできない子もいる。
39. // 何でも話しあえる親しい友だちがいる。
40. // よい友だちを選ばないと、自分までが悪くなると思う。
41. // 仕事をするとき、友だちとやるよりもひとりでやる方が好きだ。
42. // 友だちの悪口を言うことがある。
43. // むちゅうになってする趣味がある。
44. // 服の型とか色とかは自分の好みできめたい。
45. // 生き物を飼って世話をしたい。
46. // 本を買うときは自分で好きなものを選ぶ。
47. // エレキのえんそうを聞くのが好きだ。
48. // 自分の好きなテレビ番組をあまり見せてもらえない。
49. // テレビを見るより本を読む方が好きだ。
50. // スリルのある遊びがしたい。

4) 母一子間の態度の類似・差異に関する指標の確定: Newcomb 自身がそのモデルを用いての一連の研究は、主として、最初は相互に未知であった17人の学生が、数カ月におたる共同生活の過程の中で、いかにして相互に認識を深め合い、魅力を増し、またそれが分化するに至るか、また種々の態度に対する認知の正確度がどのように変化するなどに関し幾多の貴重な知見をもたらしている。(Newcomb (1960), (1961), (1963)) しかしながら母一子間の関係に適用したものは見当らない。そして、それには友人関係においてみられるものとは異った側面がある筈である。だが、Gage, Runkel (1960), (1963) の教師—生徒間関係に関する、また Daw および Gage (1967) の校長—教師間関係への適用は極めて興味深いものがある。もちろん、たとえば教師—生徒間関係におけるそれは、教師1人対、その担任する生徒20~30人との間での関係であり、そこに示される教師の行動に対する生徒の態度は、あくまでも平均値によって示されるものであって、一対一の母一子間のXをめぐっての関係に直ちに応用しうるものではないであろう。しかしながら、筆者らは、彼らのとった指標を、必ずしもそのままのかたちにおいてではないが、活用することにした。それはひとつには、彼らがその立場・地位・役割などをかなり対蹠的に異にする、傾斜のある対人関係に、均衡理論を適用し、しかも、そこから導き出される仮説をよく立証していることにもよっている。

すなわち、上記3)の手続きによって選出された6態度領域の子どもの行動に関する50項目のそれぞれにつき、子どもに対しては、(i) 子ども自身による評定(以下子—Iと略記する)(ii)母親がどのように評価しているかについての、子どもの認知に関する評定(以下子—IIと略記する)を求めた。同様にして、母親に対しては、(i)同一の50項目につき、現実の自分の子どもについての評定(以下母—Iと略記する)(ii)理想的な子どもを想定して、その子についての評定(以下母—IIと略記する)を求めた。

ところでここに態度というとき、それは一般に感情的・評価的側面なら

びに動機づけの側面を有するとされ、ある対象に対する態度は方向・程度・強度などにおいて異っており、またその具体的測定に際しては、多様な方法が考案されてはいるが（たとえば、Shaw & Wright (1967)）、最も一般的には、ある特定の項目に対し、“非常に賛成”から“非常に反対”に至るまでの何段階かの選択肢の中から、最も適切と思うひとつを選択するという形式のものが多い。

ところが、ここでは、あえて、Gage や Runkel ら (1960) が “Very much like me” から “Very much unlike me” に至る選択肢を設けたのと同様に、“非常ににている” “かなりにている” “すこしにている” “すこしちがう” “かなりちがう” “非常にちがう” という類似度に関する 6 段階の選択肢を採ることに決した。それは、先述の、子—I、子—II、母—I、母—II の 4 種類の評定を、各項目別に、また各母—子別に比較することによって、X に対する態度の、母—子間での、また、母のうち、子のうちでの類似・差異の程度をこそ明らかにし、その間のずれの大きさの程度を、母—子—X 間の均衡の体系と間接的に関係させようとしたからに他ならない。したがって、ここでは、態度の認知的側面での類似度に主として関わるのである。

さて、上記 4 種の評定を 2 つずつ組み合わせると、その可能な組み合わせは 6 種類できる。このうち、心理学的にみて意味のあると思われるのは次の 4 指標である。

A) 子どもの認知する母—子間の類似性（子—I と子—II との類似・差異の程度）〔以下に、Assumed similarity と称する〕

B) 母—子間の評定の類似性（子—I と母—I との類似・差異の程度）〔以下に、Real similarity と称する〕

C) 母親の子どもに対する評価についての、子どもの認知の正確さ（子—II と母—I との類似・差異の程度）〔以下に、Accuracy と称する〕

D) 母親の現実および理想の子どもについての評定の類似性（間接的に母親の子に対する満足度を示す指標ともいえよう）（母—I と母—II との

類似・差異の程度)〔以下に, Satisfaction と称する〕

以上の手続きによって4指標を算出することにしたが,各母子対毎の比較にあたっては,一人子で兄弟姉妹のない者もあるので,それに関する8項目を除いた残り42項目に関して,各項目毎の評定の差の絶対値をとり,その合計値をもって,仮りの指標とすることにした。これは,目的1の(ii)に対応するものである。

5) 母—子の親近感情測定に関する項目の選出:母—子—X間の体系の中で,Xに対する態度ないしは態度についての認知に関する項目が選出されたのに続いて,母—子間の感情,ことに魅力をいかにして測定するか,そのための項目をいかにして選出するかが次の課題となる。ところがそれに関する従来の資料は極めて乏しい。その中にあって,青木邦子(1966)の作成にかかる接触様式に基づいた親子の親近感情測定の尺度は,われわれに対しても示唆を与えるところが大きい。ここでは,その尺度から,親および疎の因子負荷量の多い項目を10項目選出し,子どもの側からのみならず母親の側から見た対応する項目を試作し,その表現を被験者の立場にふさわしいように改訂をほどこし,また被験者と同年輩の子ども2名ならびにその母親の意見を聴した。これは,目的1の(iii)に対応するものである。その項目は次に示される通りである。

6) 設問形式の確定:ところで上述のような質問紙形式で母—子—X間の関係についての資料を得ようとするのに当たって,どのような設問形式をとることが,母にとっても,子にとっても,防衛機制の働くことを低め,比較的,彼らの主観的真実を表明しやすいであろうか。この点についても,われわれは明確な参照するに足る資料をもってはいない。しかし,少なくとも,“あなたは～ですか”というような直截的表現をとるよりは,1段階間において,最も代表的な男性名,女性名として太郎・花子を取り,“太郎(花子)は～である”“太郎(花子)は私と～”とし,それにつづけて先述の6肢選択の選択肢中最適のひとつを選ばせるようにした方が,応答がかえって率直にできやすいのではないかと,われわれの間では推論さ

母—子間の親近感情測定のための項目一覧

1) 子どもからみて:

次に太郎（花子）のおかあさんのことが書いてあります。あなたのおかあさんとくらべてどのくらいよくにているかを考えて下さい。さっきと同じように「非常によくにている」ときは1に……「非常にちがう」ときは6に○をつけて下さい。次の文章をよく読んで、6つの答えの中からいちばんぴったりするのをひとつだけえらんで○をつけて下さい。

			非 常 に に て い る	か な り に に て い る	す こ し に に て い る	す こ し ち が う	か な り ち が う	非 常 に ち が う	
51.	太郎(花子)の母は、	太郎(花子)といっ しよに歩くのをいや がる。	…太郎(花子)の母 は、私の母と…	1	2	3	4	5	6
52.	〃	太郎(花子)のかげ口 をいうことがある。	〃	1	2	3	4	5	6
53.	〃	太郎(花子)のする ことに関心がない。	〃	1	2	3	4	5	6
54.	〃	太郎(花子)などい なくてもよいと思っ ている。	〃	1	2	3	4	5	6
55.	〃	太郎(花子)の気持を よく理解している。	〃	1	2	3	4	5	6
56.	〃	太郎(花子)をりっ ぱだと思っている。	〃	1	2	3	4	5	6
57.	〃	太郎(花子)が学校 でも社会でもなんと かやっていけるだろ うと思っている。	〃	1	2	3	4	5	6
58.	〃	太郎(花子)のため なら何をしてよい と思っている。	〃	1	2	3	4	5	6
59.	〃	太郎(花子)の顔を しばらく見ないとさ びしがる。	〃	1	2	3	4	5	6
60.	〃	太郎(花子)のする 話をよろこんで聞く。	〃	1	2	3	4	5	6

2) 母親からみて:

51.	太郎(花子)は、母といっしょに歩くのをいやがる。	太郎(花子)は私の子どもと	1	2	3	4	5	6
52.	母のかげ口をいうことがある。	母のかげ口をいうことがある。	1	2	3	4	5	6
53.	母のすることに関心が無い。	母のすることに関心が無い。	1	2	3	4	5	6
54.	母などいなくてもよいと思っている。	母などいなくてもよいと思っている。	1	2	3	4	5	6
55.	母の気持ちをよく理解している。	母の気持ちをよく理解している。	1	2	3	4	5	6
56.	母をりっぱだと思っている。	母をりっぱだと思っている。	1	2	3	4	5	6
57.	母が家庭のことも世間のこともうまくやってくれると思っている。	母が家庭のことも世間のこともうまくやってくれると思っている。	1	2	3	4	5	6
58.	母のためなら何をしてもよいと思っている。	母のためなら何をしてもよいと思っている。	1	2	3	4	5	6
59.	家にかえって母がいないとさみしがる。	家にかえって母がいないとさみしがる。	1	2	3	4	5	6
60.	母のする話をよろこんで聞く。	母のする話をよろこんで聞く。	1	2	3	4	5	6

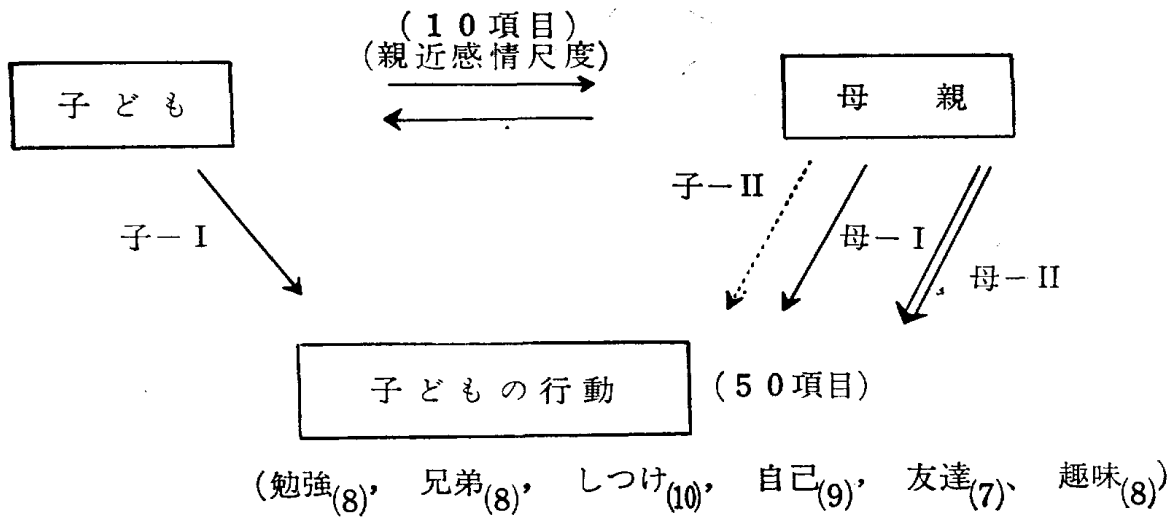
れた。このような観点に立って、われわれは上記の形式を採択することにした。

このようにして質目項目構成の基本的枠組がつくられた。

今その要旨を模式的に示すと、第1図のようになる。

7) 以上(2)から(6)にわたる手続きを経て試作された質問項目は、果たして小学校5年・中学校2年の生徒ならびにその母親にとって実際に使用に耐えうるものであろうか。そこで次に、上記設問を、比較的同等な社会階層の公立中学校2年・小学校5年の男女生徒各約50名ならびにその母親に対して施行した。それとともに、教師・母親を含む数名の有識者、ならびに同年輩の子どもの意見を聴した。それは表現の適切さ、項目の理解度、反応の一般的傾向などについての予備知識を得ること、ならびに、子どもの性差および年齢差による影響の有無を吟味するためであった。

その結果、設問・応答形式とも使用可能であることが確認された。また



- 子-I : 上記6 態度領域の子どもの行動に関する子ども自身による評定
- 子-II : 上記6 領域の行動に関する母親の評価についての子どもの認知の評定
- 母-I : 上記6 領域の行動に関する現実の子どもについての母親による評定
- 母-II : 上記6 領域の行動に関する理想の子どもについての母親による評定

第1図 質問項目構成の基本的枠組の模式図

	非 常 に に て い る	か な り に に て い る	す こ し に に て い る	す こ し ち が う	か な り ち が う	非 常 に ち が う
(例)						
子-I : 太郎(花子)はときどき勉強するのがいやになる。 太郎(花子)は私と	①	2	3	4	5	6
子-II : 同 上 おかあさんは太郎(花子)を私と*	1	2	3	4	⑤	6
母-I : 同 上 太郎(花子)は私の子どもと	1	②	3	4	5	6
母-II : 同 上 太郎(花子)は理想的な子どもと	1	2	3	④	5	6
*子-IIに関しては、選択肢は「非常ににていると思うだろう」というようになっている。						

性差・年齢差については、IVの結果の中で略述する。

8) 以上の段階を経て、都内私立女子中学2年生2学級の生徒ならびにその母親を対象として、一連の実験的調査を施行した。これは基本的には、Campbellら(1957), (1963)によって示されている計画にしたがって実験群・統制群を設け、両群に、上記質問紙を事前テストとして施行し、その約半月後に、実験群に対しては、母の現実ならびに理想の子どもについての認知についてのフィードバックを行ない、それから約2週間後に、同

一の事後テストを、実験・統制の両群に施行したものである。

ここで報告するのは事前テストの段階までのものであるが、子—Ⅰ・子—Ⅱ・母—Ⅰ・母—Ⅱのそれぞれの反応分布、平均値を求め、これに基づき、**各項目毎**に、これらの平均値の差の検定を行ない、母子の態度の類似度を調べ、差の一般的傾向に関する吟味をおこなった。

ついで**各母—子対毎**に、上記(4)の手続きにしたがって4指標を算出した。さらに、母—子間の親近感情得点の相関を求め、均衡理論に基づいて樹てられた仮説にしたがって、母—子のXに対する態度に関する4指標と、母—子間の親近感情間の相関を求めた。

IV 結 果

1) 予備調査の結果

Ⅲ—2で略述したような手続きで、小学校5年・中学校2年の子どもならびにその母親に対し、8問からなる自由記述式質問紙を配布し、それへの記入を求めたのであるが、その結果については、筆者らの共同研究者の一人鈴木がさらに分析を試みているので、詳しくは別稿に記述してあるそれを参照されたい。ここには、その分析の結果に基づいて、筆者らが結局選出した、母—子にとってともに重要と認知される態度は、勉強・兄弟・しつけ・自己・友達・趣味の6領域であることを指摘するに止める。

2) 性差および年齢差

これはⅢにおいて述べたような手続きによって作成された筆者らの質問紙法の形式による研究の手段が、果たして実際の使用に耐えうるかを検討するに際して、Ⅲ—7で述べたように、小学校5年および中学校2年男女生徒各約50名ならびにその母親を対象として調査を行ったものに関する結果の一部である。

子—Ⅰ、すなわち選出された6態度領域の子どもの行動に関する自分自身による評定、ならびに子—Ⅱ、すなわち、それらに関する母親の評価についての子どもの認知の評定、とに関し、各項目に対する段階での応答を、

“非常ににている”には1を，“非常にちがう”には6を仮りに与えるようにして，その反応分布および平均値を算出し，これを男女別に，ならびに，小学校5年と中学校2年別に，その差の検定を試みたものである。

その結果一覧は下記第1～2表に示される通りである。そこから明らかなように，子一I，および子一IIを通じて，反応傾向には，たしかに，男女間において，また，学年間において差異が認められる。ただし有意差のある項目だけをとってみても，性別による，また年齢別による明確な一貫した傾向は認められていない。

つぎに，それぞれの学年内での男女差よりは，それぞれの性の中での年齢差の方が大きい傾向がある。

また，子一Iに対する反応よりは，子一IIに対する反応において，性差や年齢差が顕著に現われる傾向がある。すなわち，子どもが自分の行動をどう思うかという面よりは，母親は自分の行動をどう評価していると思うかという面において，性差や年齢差が現われる傾向が認められた。ことに子一IIにおける，男子の反応には，中学2年と小学4年との間には，50項目中17項目において（例数が比較的少ないため，10%水準までも顧慮すれば。また5%水準以上でも14項目において）有意差が見出された。

これらの結果からみるならば，母一子一X間関係をみるにあたっては，われわれの調査具に対する反応による限りでは，たしかに性差・年齢差などの変数もまた結果に影響を及ぼす要因たりうるものが考えられる。しかしながら，本研究では，この点に関しては，比較的均質と思われる地域階層の子どもが用いられたにもせよ，例数も少なく，また，標本抽出も組織的に行なわれたのでもなく，加えて，その結果は必ずしも一貫性のあるものでなかったことの故に，それは改めて考究されるべき課題のひとつとして残し，次の実験的本調査の段階においては，これらの変数は統制し，子どもは中学2年女子に限定することにしたのである。

3) 領域・項目別にみた母一子の態度の類似度ならびにそれに関する諸指標

第1表 子どもの男女別・学年別反応一覧および男女差・学年差一覧

(① 子-I)

子-I

項目番号	反 応 平 均 値				反 応 男 女 差 (男 - 女)				反 応 学 年 差 (中 2 - 小 5)			
	小 男	5 女	中 男	2 女	小 5	p.	中 2	p.	男	p.	女	p.
1	4.07	3.66	3.80	4.30	0.41	.10	-0.50		-0.27		0.65	.025
2	3.75	3.86	3.89	4.24	-0.11		-0.35		0.14		0.38	
3	2.67	2.29	2.20	2.38	0.38		-0.18		-0.47		0.10	
4	3.04	3.00	3.35	3.05	0.04		0.03		0.31		0.05	
5	4.07	3.55	4.29	4.24	0.52		0.05		0.22		0.69	.10
6	3.57	3.93	3.36	3.90	0.36		-0.54		-0.21		-0.03	
7	3.00	3.18	2.72	3.05	-0.18		-0.33		-0.28		-0.13	
8	2.67	2.24	3.27	2.86	0.43		0.32		0.60		0.62	.05
9	3.64	3.93	2.67	3.17	0.29		0.50		-0.97	.05	-0.76	.10
10	5.44	5.44	5.30	5.06	0.00		0.25		-0.14		-0.39	
11	4.79	4.81	5.26	5.00	-0.02		0.26		0.47		0.19	
12	4.04	3.73	4.59	4.33	0.31		0.26		0.55		0.60	
13	4.38	4.67	4.23	4.17	-0.29		0.06		-0.15		-0.50	
14	2.44	3.63	3.81	4.50	-1.19	.05	-0.61		1.37	.01	0.87	.10
15	3.28	3.59	4.46	4.61	-0.31		-0.16		1.18	.02	1.02	.05
16	4.16	4.49	4.58	5.06	-0.25		-0.48		0.42		0.65	
17	3.00	3.28	2.64	3.14	-0.28		-0.50		-0.36		-0.13	
18	3.93	3.90	3.08	3.48	0.03		-0.40		-0.85		-0.42	
19	3.39	3.48	3.00	3.48	-0.09		-0.48		-0.39		-0.01	
20	3.50	3.90	3.44	3.90	-0.40		-0.46		-0.06		0.00	
21	3.96	3.38	3.12	3.67	0.58	.05	-0.55	.10	-0.84	.01	0.29	
22	3.46	3.03	3.32	3.50	0.43		-0.22		-0.14		0.47	
23	2.93	3.28	3.39	2.91	-0.35		0.48		0.46		-0.37	
24	3.54	3.93	3.48	4.33	-0.39		-0.85	.10	-0.06		0.40	
25	3.04	3.55	2.83	3.62	-0.51		-0.79	.05	-0.21		0.07	
26	2.89	3.61	3.65	3.75	-0.72	.10	-0.10		1.16	.01	0.14	
27	3.46	3.38	4.32	4.05	0.08		0.27		0.86	.10	0.67	
28	4.11	4.17	3.76	3.95	-0.06		-0.19		0.35		-0.22	
29	4.21	4.50	3.96	3.67	-0.29		0.29		0.25		-0.83	.025
30	3.18	3.31	2.76	3.05	-0.13		-0.29		0.52	.10	-0.26	
31	3.89	3.39	3.16	3.10	0.50		0.07		-0.73	.10	-0.30	
32	3.04	2.55	3.20	2.62	0.49		0.58		0.16		0.07	

子—I

項目番号	反応平均値				反応男女差(男—女)				反応学年差(中2—小5)			
	小男	5女	中男	2女	小5	p.	中2	p.	男	p.	女	p.
33	2.61	2.93	2.28	2.57	0.32		-0.29		-0.33		-0.36	
34	3.57	3.62	3.85	3.33	-0.05		0.51	.10	0.28		-0.29	
35	3.82	3.52	4.25	3.43	0.30		0.82	.001	0.43		-0.09	
36	1.79	2.34	2.48	2.86	-0.55	.10	-0.38		0.69	.025	0.51	
37	5.14	4.76	5.00	5.38	0.38		-0.38		-0.14		0.62	.025
38	2.54	3.48	2.96	3.38	-0.94	.05	-0.42		0.42		-0.10	
39	2.25	2.17	3.56	2.33	0.08		0.23		1.31	.005	0.16	
40	3.15	3.69	2.96	3.19	-0.54		-0.23		-0.16		-0.50	
41	3.50	3.86	3.60	3.43	-0.36		0.17		0.10		-0.43	
42	2.54	3.14	3.88	3.19	-0.60		0.69	.05	1.34	.005	0.05	
43	1.71	2.48	2.24	3.38	-0.77		-1.14	.01	0.53		0.90	.05
44	2.79	2.79	3.24	2.71	0.00		0.53		0.45		-0.08	
45	1.79	1.93	2.80	2.52	-0.14		0.28		1.01	.025	0.59	.10
46	1.32	2.28	1.96	2.24	-0.96	.05	-0.28		0.64	.025	-0.04	
47	3.46	4.55	3.44	3.48	-1.09	.025	-0.04		-0.02		-1.08	.05
48	4.29	4.17	4.36	4.47	0.12		-0.11		0.07		0.30	
49	3.89	3.69	3.84	3.43	0.20		0.41		-0.05		-0.26	
50	2.39	3.38	3.12	3.57	-0.99	.01	-0.45		0.73	.10	-0.19	
51	5.50	5.38	5.04	5.79	0.12		-0.75	.001	0.46		0.41	.05
52	5.61	5.45	5.09	5.19	0.16		-0.10		-0.54		-0.26	
53	5.11	4.86	4.96	5.24	0.25		-0.28		-0.15		0.38	
54	5.68	5.66	5.80	5.81	0.02		-0.02		0.11		0.16	
55	1.89	2.69	2.75	2.33	-0.80	.05	0.42		0.86	.05	-0.36	
56	3.39	3.72	3.33	4.00	-0.33		-0.67	.05	-0.06		0.28	
57	2.85	3.31	2.83	3.45	-0.46		-0.62	.10	-0.02		0.14	
58	3.57	3.45	2.91	2.52	0.12		0.39		-0.66	.10	-0.92	.10
59	3.11	3.24	3.55	2.95	-0.13		0.59		0.44		-0.29	
60	2.89	2.97	2.92	3.00	-0.08		-0.08		0.03		0.04	

筆者らは、目的 1—ii に対応する、基本的方法および具体的手続きとして、Ⅲ—4 において述べたところにしたがって、母—子間の態度の類似・差異に関する 4 指標を確定した。そしてそれを、各母—子対毎にだけでは

第2表 子どもの男女別・学年別反応一覧および男女差・学年差一覧
(② 子一Ⅱ)

子一Ⅱ

項目番号	反 応 平 均 値				反応男女差 (男-女)				反応学年差(中2-小5)			
	小男	5女	中男	2女	小5	p.	中2	p.	男	p.	女	p.
1	4.14	3.79	3.79	4.24	0.35		-0.45		-0.35		0.45	
2	4.29	4.03	3.92	4.33	0.26		-0.42		-0.37		0.30	
3	2.86	2.52	2.48	2.43	0.34		0.05		-0.38		-0.09	
4	2.96	3.36	3.75	2.67	-0.40		1.08	.05	0.79	.05	-0.69	.05
5	3.79	4.03	4.38	4.33	0.24		0.04		0.59		0.30	
6	3.75	3.69	2.79	3.81	0.06		-1.02	.01	-0.96	.025	0.12	
7	3.07	3.52	3.00	3.38	-0.45		0.38		-0.07		-0.13	
8	3.18	2.97	3.08	3.45	0.21		-0.37		-0.10		0.49	
9	3.72	3.41	2.55	3.17	0.31		-0.62	.10	-1.17	.005	-0.24	
10	5.24	5.48	5.32	5.06	-0.24		0.26		0.08		-0.43	
11	4.56	4.30	4.91	4.94	0.26		-0.04		0.35		0.65	.10
12	3.84	3.67	4.23	4.56	0.17		-0.33		0.39		0.89	.025
13	4.04	4.26	4.23	4.39	-0.22		-0.16		0.19		0.13	
14	3.08	3.85	4.19	4.35	-0.77	.10	-0.16		1.11	.01	-0.50	
15	4.04	3.63	4.09	4.56	0.41		-0.46		0.05		0.93	.10
16	4.04	4.63	4.91	5.28	-0.59		-0.37		0.87	.025	0.65	.10
17	3.21	3.45	3.13	3.86	-0.24		-0.73	.10	-0.08		0.41	
18	3.93	3.79	3.48	3.76	0.14		-0.28		-0.35		-0.03	
19	3.29	3.28	2.96	3.95	0.01		-0.96	.02	-0.33		0.68	.10
20	3.89	3.45	3.44	4.33	0.44		-0.90	.02	-0.45		-0.12	
21	3.68	3.52	2.96	3.57	0.16		-0.61	.10	-0.72	.10	0.05	
22	3.93	2.72	3.33	3.86	1.21	.005	-0.52		-0.60	.10	1.13	.005
23	3.25	3.14	3.17	2.91	0.11		0.26		-0.08		-0.23	
24	3.64	3.62	3.58	3.71	0.02		-0.13		-0.06		0.09	
25	3.57	3.38	2.91	4.00	0.19		-1.09	.01	-0.66		0.62	.10
26	2.32	3.45	3.67	3.35	-1.13	.005	0.34		1.35	.005	-0.10	
27	3.52	4.17	4.58	4.24	-0.65		0.35		1.06	.025	0.07	
28	4.04	4.55	4.29	4.14	-0.51		0.15		0.25		-0.41	
29	3.96	4.31	3.92	3.91	-0.35		0.01		-0.04		-0.41	
30	3.50	3.48	2.77	3.71	0.02		-0.95	.02	-0.73	.025	0.23	
31	3.71	3.66	3.25	2.91	0.05		0.35		-0.46		-0.75	.10
32	3.43	3.21	3.71	2.95	0.22		0.76	.10	0.28		-0.25	

子一Ⅱ

項目番号	反応平均値				反応男女差(男-女)				反応学年差(中2-小5)			
	小男	5女	中男	2女	小5	p.	中2	p.	男	p.	女	p.
33	2.93	3.21	2.70	3.00	-0.28		-0.30		-0.23		-0.21	
34	3.43	3.66	4.21	3.57	-0.23		0.64	.10	0.78	.025	-0.08	
35	3.57	3.29	3.87	2.91	0.28		0.97	.02	0.30		-0.38	
36	2.00	2.45	2.42	2.62	-0.45		-0.20		0.42		0.17	
37	5.43	4.45	4.88	5.19	0.98	.005	-0.30		-0.55	.10	0.74	.01
38	3.04	3.52	3.87	3.95	-0.48		-0.08		0.83	.05	0.44	
39	2.56	2.55	3.57	2.57	0.01		0.99	.01	1.01	.01	0.02	
40	3.36	3.69	2.92	3.33	-0.33		-0.42		-0.44		-0.36	
41	3.43	3.93	3.58	3.43	-0.50		0.15		0.15		-0.50	
42	2.96	3.93	4.17	3.43	-0.97	.01	0.74	.05	1.21	.005	-0.50	
43	1.93	2.79	2.83	3.29	-0.86	.05	-0.45		1.10	.01	0.50	
44	3.50	3.41	3.21	2.91	0.09		0.30		-0.29		-0.51	
45	2.75	2.48	2.63	2.91	0.27		-0.28		-0.12		0.49	
46	1.71	2.41	2.13	2.57	-0.70	.05	-0.45		0.42		0.16	
47	3.68	4.45	2.13	3.48	-0.77	.10	-0.35		-1.55	.005	0.97	.01
48	4.57	3.54	4.50	4.55	0.03		-0.05		-0.07		0.02	
49	4.32	3.83	3.91	4.05	0.49		-0.14		-0.41		0.22	
50	3.11	3.97	3.28	3.95	-0.86	.05	-0.68		0.16		0.01	

なく、各領域項目別毎の検討をも行なった。本分節に関しては、この後者に関する結果について報告する。

Ⅲ-4で明らかにした、態度の類似度に関する4指標とは、A) Assumed similarity B) Real similarity C) Accuracy D) Satisfaction と仮称したものであった。これは本来は、各母-子対毎に、その態度の類似度を見るために考案された4指標ではあるが、いま各項目別に、子一Ⅰ、子一Ⅱ、母一Ⅰ、および母一Ⅱに関する平均値をとり、先述の4指標に対応する組合せに関して、その平均値の差の検定を行なうならば、筆者らがここで問題としている4指標の相対的意義を明らかにするひとつの手がかりを得ることにもなるであろう。

そこで、本調査の事前テストにおける反応の平均値を算出したのが、次

第3表 本調査（事前テスト）における反応の平均値一覧表

領域	指標 項目番号	子 — I		子 — II		母 — I		母 — II	
		A 組	B 組	A 組	B 組	A 組	B 組	A 組	B 組
勉 強 (8)	1	3.940	3.848	4.020	3.957	2.959	2.958	1.820	2.085
	2	3.740	3.696	3.940	4.022	3.388	3.347	2.140	2.043
	3	2.429	2.713	2.420	2.957	1.600	1.918	1.440	1.625
	4	3.280	3.370	3.240	3.087	1.600	3.957	5.143	5.348
	5	3.720	4.065	4.160	4.091	4.320	4.146	4.460	4.521
	6	4.340	4.383	4.200	3.556	3.340	3.652	2.840	3.087
	7	3.520	3.378	3.320	3.356	3.020	3.229	2.520	2.681
	8	2.660	2.348	2.860	2.622	3.347	3.340	2.776	2.936
兄 弟 (8)	9	2.864	2.718	3.023	2.789	2.721	2.317	1.636	1.425
	10	5.091	5.205	5.295	5.289	5.023	5.366	5.523	5.525
	11	5.409	5.359	5.159	5.184	5.227	5.707	5.477	5.700
	12	4.000	4.282	4.136	3.974	3.591	3.293	2.341	1.900
	13	3.545	3.297	3.841	4.079	3.659	3.675	3.932	4.050
	14	3.932	4.316	4.273	4.487	3.705	4.225	4.614	4.795
	15	4.273	4.744	4.455	4.553	3.795	3.902	3.674	4.282
	16	4.659	4.564	4.795	4.737	4.045	4.683	4.864	4.975
し っ け (10)	17	2.860	2.957	3.440	3.682	2.560	2.917	1.480	1.553
	18	3.340	3.644	3.960	3.795	3.220	3.167	2.020	1.851
	19	2.840	3.000	3.160	3.409	2.640	2.771	1.680	2.234
	20	4.060	4.000	4.100	3.978	3.041	3.207	1.720	1.782
	21	3.673	3.644	3.800	3.682	2.840	3.167	1.840	1.771
	22	3.080	3.356	3.400	3.477	3.260	3.521	2.240	2.354
	23	3.340	3.489	3.460	3.477	3.220	3.292	4.694	4.702
	24	3.725	3.800	3.560	3.745	3.880	4.104	5.040	5.217
	25	2.980	3.261	3.320	3.622	2.843	3.021	1.612	1.681
	26	3.960	3.913	4.240	3.733	4.420	4.229	4.920	5.000
自 己 (9)	27	3.760	4.283	4.320	4.556	4.400	5.000	4.694	4.913
	28	4.580	4.522	4.490	4.667	4.920	5.146	4.980	5.239
	29	4.100	4.000	3.920	3.957	4.191	4.708	4.340	4.340
	30	3.040	2.778	3.220	3.457	2.820	2.875	1.820	1.660
	31	3.480	3.156	2.960	3.217	3.000	2.979	3.280	3.085
	32	3.220	3.391	3.673	4.067	3.640	3.667	3.940	4.196

領域	指標 項目 組 番号	子 - I		子 - II		母 - I		母 - II	
		A 組	B 組	A 組	B 組	A 組	B 組	A 組	B 組
	33	3.160	2.609	3.580	3.432	2.780	3.104	2.184	2.383
	34	3.880	3.872	4.060	4.200	4.373	4.319	4.700	4.804
	35	3.540	3.467	3.380	3.386	4.204	4.125	5.102	5.304
友 達 (7)	36	2.300	2.378	2.235	2.174	2.300	2.229	2.157	1.739
	37	5.400	5.267	5.180	5.174	4.860	5.213	4.900	5.234
	38	3.480	3.467	3.633	3.889	4.098	4.167	4.180	4.587
	39	1.900	2.089	2.260	2.022	2.000	1.851	1.540	1.478
	40	3.800	3.556	3.520	3.091	3.380	3.063	3.060	3.170
	41	4.240	4.304	4.140	4.114	4.085	4.085	3.900	4.109
	42	3.720	3.957	3.960	4.227	4.680	4.896	5.080	5.149
趣 味 (8)	43	2.540	2.783	2.620	3.022	2.800	2.958	2.240	2.277
	44	2.620	2.913	2.680	2.435	2.480	2.854	2.900	2.553
	45	2.320	2.587	2.840	2.889	2.840	3.063	2.040	2.319
	46	1.620	1.870	1.780	2.174	1.940	2.104	2.100	1.915
	47	2.900	2.609	3.060	2.864	3.060	3.063	3.580	3.489
	48	4.920	4.413	4.760	4.913	4.660	4.563	4.143	4.413
	49	4.080	3.500	4.160	3.391	3.760	3.708	2.520	2.426
	50	3.280	2.935	3.720	3.761	4.306	4.667	4.580	4.787

に示す第3表である。

それに基づいて、上記4指標に関する平均値の差の有意性の検定を行った結果が、次の第4表である。

さらに、調査対象となった2学級において、ともに5%水準以上の有意差のみられたものを、領域別にまとめて表示すると、第5表のようになる。

第5表からも明らかのように、これを4指標に関してみるならば、まず A) Assumed similarity においては、有意差のみられたものは、50項目中わずか1項目に過ぎない。B) Real similarity および C) Accuracy に関しては、それぞれ、9および11と約2割前後のものに有意差がみられる。これに対し、最後の D) Satisfaction に関しては、実に23とほぼ半

第4表 本調査(事前テスト)における4指標の差の有意性検定結果一覧表

領域	項目	Assumed Similarity 子-I - 子-II		Real Similarity 子-I - 母-I		Accuracy 子-II - 母-I		Satisfaction 母-I - 母-II	
		A 組	B 組	A 組	B 組	A 組	B 組	A 組	B 組
		指標		指標		指標		指標	
勉強(8)	1	-0.080	-0.109	0.981***	0.890**	1.061***	0.999***	1.130***	0.873***
	2	-0.200	-0.326	0.352	0.349	0.552*	0.675**	1.240***	1.304***
	3	0.009	-0.244	0.829***	0.795**	0.820***	1.039***	0.160	0.293
	4	0.040	0.283	1.680***	-0.587	1.640***	-0.870**	-3.543***	-1.391***
	5	-0.440	-0.026	-0.600	-0.081	-0.160	-0.055	-0.140	-0.375
	6	0.140	0.827**	1.000**	0.731*	0.860**	-0.096	0.500	0.565*
	7	0.200	0.022	0.500*	0.149	0.300	0.127	0.500*	0.548*
	8	-0.200	-0.274	0.687**	0.992**	0.487	-0.718*	0.576*	0.404
兄弟(8)	9	-0.159	-0.071	0.143	0.401	0.302	0.472	1.085***	0.892***
	10	-0.204	-0.084	0.068	-0.155	0.272	-0.077	-0.500*	-0.159
	11	0.250	0.175	0.182	-0.348	-0.068	-0.523*	0.250	0.007
	12	-0.136	0.308	0.409	0.989**	0.545*	0.681*	1.250***	1.393***
	13	-0.296	-0.782**	-0.114	-0.378	0.182	0.404	0.273	-0.375
	14	-0.341	-0.171	0.227	0.091	0.568	0.262	-0.909***	-0.570
	15	-0.182	0.191	0.478	0.842**	0.660*	0.651*	0.121	-0.380
	16	-0.136	-0.173	0.614*	0.119	0.750**	0.134	-0.819**	-0.292
しつけ(10)	17	-0.580*	-0.725**	0.300	0.040	0.880**	0.765**	1.080***	1.364***
	18	-0.620*	-0.151	0.120	0.477	0.740**	0.628*	1.200***	1.316***
	19	-0.320	-0.409	0.200	0.167	0.520	0.638*	0.960***	0.537*
	20	-0.040	0.022	1.019***	0.792**	0.059	0.770**	1.321***	1.426***
	21	-0.127	-0.038	0.833***	0.477	0.960***	0.515*	1.000***	1.396***
	22	-0.320	0.121	-0.180	-0.165	0.140	-0.044	1.020***	1.167***
	23	-0.120	0.012	0.120	0.197	0.240	0.185	-1.474***	-1.410***
	24	0.165	0.055	-0.155	-0.304	0.320	-0.459	-1.160***	-1.113***
	25	-0.340	-0.361	0.137	0.240	0.477	0.601*	1.231***	1.340***
	26	-0.280	0.180	-0.460	-0.316	-0.200	-0.496	-0.500*	-0.771**
自己(9)	27	-0.560	-0.273	-0.640*	-0.717*	0.080	-0.444	0.294	0.087
	28	0.090	-0.145	-0.340	-0.624*	-0.430*	-0.479*	-0.060	-0.093
	29	0.180	0.043	-0.091	-0.708**	0.271	-0.751**	-0.149	0.368
	30	-0.180	-0.679*	0.220	-0.097	0.400	0.582*	1.000***	1.215***
	31	0.520*	-0.061	0.480*	0.177	-0.140	0.238	-0.280	-0.106
	32	-0.453	-0.676**	-0.420	-0.276	0.033	0.400	-0.300	-0.529*
	33	-0.420	-0.823***	0.380	-0.495	0.800**	0.328	0.596*	0.721**
	34	-0.180	-0.328	-0.493*	-0.447	-0.313	-0.119	-0.327	-0.485*
	35	0.160	0.081	-0.664*	-0.658*	-0.824**	-0.739*	-0.898***	-1.179***
	友達(7)	36	-0.065	0.204	0.000	0.149	0.065	-0.055	0.143
37		0.220	0.093	0.540*	0.054	0.320	-0.039	-0.040	-0.021
38		-0.153	-0.422	-0.618*	-0.700*	0.465	-0.278	-0.082	-0.420
39		-0.360	0.067	-0.100	0.238	0.260	0.171	0.460**	0.373
40		0.280	0.465	0.420	0.493	0.140	0.028	0.320	-0.107
41		0.100	0.190	0.155	0.219	0.055	0.029	0.185	-0.024
42		-0.240	-0.270	-0.960***	-0.939***	0.720**	-0.669**	-0.400	-0.253
趣味(8)	43	-0.080	-0.239	-0.260	-0.175	-0.180	0.064	0.560*	0.681*
	44	-0.060	0.478	0.140	0.059	-0.200	-0.419	-0.420	0.301
	45	-0.520	-0.302	-0.520*	-0.476	0.000	-0.174	0.800***	0.744*
	46	-0.160	-0.304	-0.320	-0.234	-0.160	0.070	-0.160	0.189
	47	-0.160	-0.255	0.160	-0.454	0.000	-0.199	-0.520*	-0.426
	48	0.160	-0.500	0.260	-0.150	0.100	0.350	0.517*	0.150
	49	-0.080	0.109	0.320	-0.208	0.400	-0.317	1.240***	1.282***
	50	-0.440	-0.826*	-1.026***	-1.732***	0.586*	-0.906**	-0.274	-0.120

* : 5%水準で有意, ** : 1%水準で有意, *** : 0.1%水準で有意

第5表 4指標に関して有意差のみられた対象領域別項目数一覧

指標 \ 領域 ()内は 項目数	勉強 (8)	兄弟 (8)	しつけ (10)	自己 (9)	友達 (7)	趣味 (9)	計 (50)
A) Assumed Similarity	0	0	1	0	0	0	1
B) Real Similarity	4	0	1	1	2	1	9
C) Accuracy	4	1	3	1	1	1	11
D) Satisfaction	4	3	10	3	0	3	23
計	12	4	15	5	3	5	44

数近くのものに有意差がみられる。

これはもとより各母—子対毎の結果ではない。したがって、この結果をただちに個人の次元に還元して論じることには無理があるが、しかし少なくとも、Assumed similarity に関しては、ほとんど有意差が認められなかったという事実は、子ども自身の評定と、母親の評価についての子ども認知との間では、自己の認知体系内では比較的均衡が保たれやすく、それが評定にも反映しているものと解することが可能であろう。

次に、Real similarity および Accuracy は、母—子間の比較から得られる指標であるが、これらにおいて有意差のみられた項目をさらに吟味すると、それは、一般に、母親の評価の方が、子ども自身の評定や、母親の評価についての子ども認知よりは、総じて望ましいと考えられる方向に偏っている傾向が認められた。もちろん、ここで用いられた項目への6肢選択の応答は、必ずしも、一方の極への反応の方が、他方の極への反応よりも望ましいと判定されるように作成されているわけではない。しかしながら、たとえば、1. “勉強をよくする方だ” をみても、あるいはまた、42 “友だちの悪口を言うことがある” をみても、平均値によってみる限りは、母親の方が、子どもよりも、好ましい評定をしていることが知られる

であろう。

第3に、最も有意差の多くみられたのは、**Satisfaction** であったが、これは、母親が現実の子どもならびに理想の子どもについて評定し、その間のずれによってみている指標であるので、差が他の指標に比して大きくなることは当然予期されたところである。むしろこの指標を**Satisfaction** と仮称したことの方にやや問題があるといえるかもしれない。

最後に、領域別にみるならば、勉強およびしつけの領域において、差異が顕著である。ことに、しつけの領域では、**Satisfaction** の指標については、10項目のすべてにおいて、現実の子どもは、母親の理想とする子どもの行動からはかなり隔っていることが示されている、つまりすべての項目で有意差が認められている。これに対し、兄弟や友達のような対人関係に関する領域では、比較的差が多くは認められていない。

この結果は、次の分節と併せて考察すると、より鮮明な像が得られるであろう。

4) 各母一子対別にみた、母一子の態度の類似度ならびにそれに関する諸指標

筆者らは、前分節に述べたものとともに、各母一子対毎に、先述の4指標の算出を行った。これは、50項目中、一人子の場合にはその部分がblankとなるため、それを除いた42項目に関して、Ⅲ-4で述べた手続きにしたがって、各母一子対毎に各項目に対する評定のずれの有無、その大きさをチェックし、その絶対値の合計値をもって、仮りに、各対毎の指標を示すものとしたものである。なお、いずれかにblankなり、二重のチェックのあるデータははぶいたため、完全なデータは70前後に過ぎないが、その度数分布表を示すと第6表のようになる。

この表からも明らかなように、またそれぞれの中央値からも明らかなように、A) **Assumed similarity** に関しては、ずれが最も小さい。換言すれば子どもの2つの評定の間には差が少ない。これに対して、あとの3指標においては、いずれも、平均して約1前後のずれが認められ、D) **Sat-**

第6表 指標に関する得点度数分布一覧表

4 指標 得点	(A) Assumed Similarity	(B) Real Similarity	(C) Accuracy	(D) Satisfaction
10—19	20	0	1	4
20—29	16	7	7	12
30—39	19	16	17	9
40—49	12	21	23	20
50—59	2	9	9	5
60—69	3	10	6	10
70—79	2	5	4	1
80—89	0	0	2	1
90—99	1	0	1	1
計 合	75	68	70	63

isfaction に関してのみ、特にそのずれが大きいという結果は得られていない。これは前分節の項目別にみた結果とは必ずしも対応するものではない。

5) 母—子の親近感情得点および母—子間の親近感情得点の相関関係

Ⅲ—5 に述べた手続きで選出した、母—子間の親近感情測定のための10項目は、最初の4項目(51~54)は“非常ににている”と応答するほど疎であり、“非常にちがう”と応答するほど親を示すようになっており、残りの6項目は(55~60)その逆になっている。その10項目の合計をもって親近感情を測定するための得点としたが、実際の反応分布は別表のようであったので、粗点をそのまま用いるのではなく、合理的な重味づけをほどこすことが求められた。そこで、ここでの刺激に対する反応の分布は、心理学的連続体上では正規型であるとの仮定に立って、系列範疇法による尺度化を試み、シグマ値法に基づく範疇別換算点を算出した。具体的には Edwards (1957) が示す方法により、最も親である範疇に反応した場合は0となるようにし、各範疇のz値を10倍した値をもって各項目別各範疇別の得点を算出した(第7表)。このようにして得られた母—子別の親近

第7表 親近感情得点算出の基礎及び得点分布一覽

〔1〕 各範疇別反応分布一覽

(子) 範疇 項目	1 2 3 4 5 6 ブランク						(母) 範疇 項目	1 2 3 4 5 6 ブランク					
	51	1	1	0	3	16		75 (2)	51	1	1	3	11
52	1	0	3	2	13	74 (5)	52	1	1	10	11	33	39 (2)
53	1	2	4	9	32	47 (3)	53	2	5	6	24	38	20 (3)
54	1	0	3	2	4	83 (5)	54	1	1	2	5	15	72 (2)
55	21	44	14	7	3	6 (3)	55	18	35	22	17	3	1 (2)
56	2	7	27	32	17	10 (3)	56	10	29	30	24	2	2 (2)
57	3	19	38	20	8	6 (4)	57	19	39	28	5	1	3 (3)
58	10	20	18	32	6	7 (5)	58	5	21	28	31	9	2 (2)
59	9	12	25	20	13	16 (3)	59	22	26	24	14	5	5 (2)
60	12	26	32	13	6	6 (3)	60	23	30	33	7	2	1 (2)

〔2〕 シグマ値法に基づく範疇別換算点一覽

(子) 範疇 項目	1 2 3 4 5 6						(母) 範疇 項目	1 2 3 4 5 6					
	51	29	25	23	21	14		0	51	33	28	25	19
52	28	26	22	19	14	0	52	34	30	23	17	10	0
53	33	27	23	19	11	0	53	36	29	25	19	10	0
54	27	25	21	18	15	0	54	29	25	22	18	13	0
55	0	14	20	24	27	31	55	0	10	17	24	33	39
56	0	7	16	23	32	39	56	0	10	18	20	36	39
57	0	10	20	28	34	41	57	0	10	20	28	31	35
58	0	8	14	21	28	34	58	0	10	18	25	34	43
59	0	7	13	19	24	31	59	0	9	15	21	26	32
60	0	9	17	24	29	34	60	0	9	18	31	32	38

感情得点分布は、第8表に示される通りである。

ところで、日常の観察からも知られているように、また、Newcomb (1965, 302—307頁) も明示しているように、二者関係 (dyad) においては、一般に++もしくは--のような関係で均衡が維持される傾向があるので、さらには Tagiuri (1952), (1958) の関係分析 (relational analy-

第8表 重みづけ得点法による母・子別親近感情得点分布表 (N=88)
 (*母子とも完全なものに限る)

母子別 \ 得点	0~20	21~40	41~60	61~80	81~100	101~120	121~140	141~160	161~180	181~200	200~
子 f	2	0	3	8	17	18	14	10	6	5	5
子 cf	2	2	5	13	30	48	62	72	78	83	88
母 f	2	6	8	8	13	10	9	14	9	5	4
母 cf	2	8	16	24	37	47	56	70	79	84	88

sis)における相互性 (mutuality) などの概念からも容易に推測されるように、母—子間の親近感情には正の相関関係のあることが期待される。

そこで、子の側から母をみての親近感情と、母の側から子をみてのそれとの間の積率相関を求めると、 $r=.47$ (N=88) となり、この間には1%水準で正の相関関係があることが確証された。

6) 母—子の態度の類似度と、母—子の親近感情との関係

筆者らの取り上げてきた母—子—X (子どもの行動に関する) 間関係を明らかにするための基本的枠組 (第1図を参照されたい) は、母—子間にXに関して共通のコミュニケーションのある対人的体系の中においても、また、母—子それぞれの認知体系内においても、均衡理論の示唆するところにしたがうならば、「均衡」への傾向があると解してよいであろう。ところで、それを探るために筆者らのとった具体的手段は、母—子のXに関する態度の類似度に関する4指標に関する得点と、そして母—子の親近感情に関する得点とを得ることであった。

そこで4指標のそれぞれと、親近感情との間に想定される基本的関係を、次に順次仮説の形で簡潔にみていこう。親近感情は、母の側からみたものと、子の側からみたそれとがあり、親密な感情から疎遠な感情に至るものにまでわたっていることは、既にIV—5においてみた通りである。

〔仮説1〕子の側からみた親近感情得点と、子—Iと子—IIとの比較から得られる Assumed similarity との間には正の相関関係がみられるであ

ろう。(これは子の認知体系内での均衡に関する。)

〔仮説2〕母・子双方からみた親近感情得点と、子-Iと母-Iとの比較から得られる Real similarity との間には正の相関関係がみられるであろう。(これは母一子の対人的体系の中での均衡に関する。)

〔仮説3〕子の側からみた親近感情得点と、子-IIと母-Iとの比較から得られる Accuracy との間には、正の相関関係がみられるであろう。(これは主として子の認知体系内での均衡に関する。)

〔仮説4〕母一子間の親近感情得点と、母-Iと母-IIとの比較から得られるいわゆる Satisfaction との間には、正の相関関係がみられるであろう。(これはただちに均衡関係の成立する箇所からの推論ではないが、この指標が母親の満足度に関する指標であるという意味で一応想定された。)

以上の仮説は、いずれも、積率相関を算出することによってその検討が試みられた。その相関係数を算出した結果は、下記第9表に要約される。

第9表 4指標と親近感情との相関係数

態度の指標 母子対における比較		Assumed Similarity	Real Similarity	Accuracy	Satisfaction
		子-I vs 子-II	子-I vs 母-I	子-II vs 母-I	母-I vs 母-II
親近感情	子 → 母	.40 (N=73) ***	.44 (N=65) ***	.32 (N=67) **	.08 (N=58)
	母 → 子	.33 (N=73) **	.26 (N=65) *	-.07 (N=67)	.05 (N=58)

太線でかこまれているのは上記仮説1,2,3に対応する部分である。

* 5%水準で有意

** 1%水準で有意

*** 0.1%水準で有意

この表からも明らかなように、子の側からみた親近感情と、母一子の態度のはじめの3指標との間には、いずれも1%水準ないしはそれ以上で正の相関関係が認められた。また母の側からみた親近感情と Real similarity との間には5%水準で正の相関関係が認められた。

このようにして、母—子の態度の類似度に関する指標と母—子間の親近感情得点とを通じて、母—子—X間の均衡関係成立に関する仮説は立証された。

V 考 察

本節においては、まず、筆者らの目的—方法—結果を対比しての考察を行ない、ついで本研究での制約点を明らかにし、最後に、それに基づいて今後のこの線に沿った研究の可能性、改善すべき点についての考察を試みたい。

1) 結果に関する考察

筆者らは、まず目的1において、母—子—X（子どもの行動に関する）間における基本的関係を明らかにし、またその間の均衡関係成立の吟味を行なおうとした。そのために、筆者らがとったのは、適当な既成の道具・検査具を見出しえなかったため、Gage, Runkelら（1960）、（1963）が教師—生徒間関係をみるに際して採った方法を参照して、母—子のXに対する態度に関する4指標を作成し、同時に、母—子間の親近感情測定のための尺度を試作し、これらを基として、その間の関係をみようとしたのであった。そして、仮説したような結果、すなわち、母—子の態度の類似度と親近感情との間には正の関係が認められる、換言するならば、すくなくとも、その間には均衡への傾向が確かに認められることが明らかにされた。こうして、母—子間にも、均衡理論を適用することが可能であることを示唆する、おそらくは、はじめての結果が得られたのであった。

それに附随して、筆者らは、ここでとり上げたX、すなわち子どもの行動に関して、母—子がともに重要と認知する6態度領域ならびにそれに関する具体的な50の項目に関して、各項目別に平均値を代表値として、いくつかの基礎的資料を得た。それを、各母—子対毎に得られた態度の4指標に関する分布とあわせつつ吟味するならば、子ども自身のXに対する態度についての評定と、母親がXをどう評価しているかについての子どもの認

知から得られる Assumed similarity は、他の指標に較べれば、ずれが小さいこと、また、母親の現実の子どもについての評定と理想の子どもについての評定との間には、差が大きくなる傾向のあることなどもまた明らかにされた。

さらにまた、このようなかたちで母—子—X間関係をとらえようとするとき、子どもの性や発達段階なども決して無視しえないことも示された。ただし、この変数に組織的に取り組むためには、真に比較可能な標本抽出がなされることが必須であろう。

次に、目的2で行なおうとした、Xに関する母親の評価（母—Iと母—IIとを含むもの）に関するフィードバックを与えることが、母—子—X間の体系に、ある種の不均衡を導入し、そのことが、母—子の態度変容をして行動変容へと導くきっかけとなり得るかという点に関しては、方法7で提示した研究計画によって資料を得たが、今回の報告では割愛した。その分析結果の報告や、それに関する批判的考察は改めてなされる予定である。ただここにひとつだけ問題点を指摘するならば、実験群・統制群を設けるに際して、種々の現実的理由から、また、担任教師の両学級の比較的等質との判断にしたがって、学級単位にそれを行ったが、本来はやはり、そこでの被験者全員が全く無作為なかたちで、両群のいずれかに配置されるべきであったろう。

最後に、この種問題に対する均衡理論適用の意義や限界に関しては、まだ十分なデータを得るに至ってはいないけれども、一見あたかも社会心理学的観点からの対人関係理解の枠組かと思われているものが、親—子関係という発達・人格の領域で主として取り上げられている問題に適用可能であることを示唆し得たのは興味あることに思われる。そのことは Baldwin (1967) がその近著において、通常発達理論の中では扱われることの殆どない Heider の枠組を、出発点において、かなり制約を附してではあるが、取り上げていることと考え合わせても興味深い。しかしながら、ただ単に母—子の態度の認知的側面にとどまるのではなく、筆者らは、子ど

もの行動の基底にあるものとして、母—子のXをめぐる態度をとりあげたのではあったけれども、どのようなXにこそ焦点を合わせるかというときに、さらに進んで、依存性・攻撃性・自律性・協同—競争性といった行動特性を取り上げて、この種考究を展開させる可能性を検討していくこともまた、今後なされるべきことのひとつであろう。

2) 本研究における制約点と今後の諸問題

筆者らは、多少の新知見を得ることに成功したとはいうものの、幾多の改善されるべき問題点のあることを率直に認めなくてはならない。まず選出した6領域が果たしてどれ位適切な、また必然性のあるものだったか。この点に関しては、別稿における検討がある種の示唆を与えるであろう。特定のひとつのXだけではなく、複数のXを取り出した点はよい。しかし、そこで次になすべきは、種々のXをめぐる母—子の態度にはどのような一貫性 (consistency) があるかを検討することであろう。そのためには各Xを具体的に示す計50の項目が、尺度化されることが必要であろう。そのためには、態度を測るものとしての方向・強度の明確でない項目は捨て、先に割愛した約150の項目をそのような基準からも再吟味して取り上げるべきは取り、各Xに関して、量的取り扱いができるようになることが望ましい。

次に、果たして筆者らの用いた項目に対する反応は、どの程度の変動性ないしは安定性 (stability) がみられるのであろうか。この点に関しては、未報告の統制群の事前テストと事後テストの結果の検討がある種の資料を提示することになるはずである。しかしながらなお、変動が一定期間後に、特別の操作なしにみられたとして、それは現実の行動の変化にこそ帰せられるか、それとも、この種6肢選択の形式の応答における選択行動の変動性を示すものであるのか。それらもまた明らかにされるべきである。

第3に、筆者らは、指標算出の基礎として、比較する2種類の対になった反応間のずれの42項目の絶対値の合計値を仮りに用いた。しかしながら、このような手法による場合、たとえば「1」の評定と、「2」の評定の間

のずれも1とされ、「4」の評定と「5」の評定の間のずれもまた1とされる。少なくとも、各項目ごとに、反応分布に基づいた重味づけをおこなって、その点の調整をおこなうことも考慮されるべきかもしれない。

つぎに、親近感情尺度に関しては、その項目選出の基礎となったものに青木(1966)による研究があったが、その実際の適用は、青木が本来意図しているものとはやや異ったかたちにおいてなされている。したがって、内容的妥当性の一部に関しては2～3の洞察力をもった、同年輩の子女を有する母親や、同年輩の生徒をもつ経験の豊かな教師の批判を求めはしたが、さらに組織的な妥当性の検討が必要となるであろう。たとえば、この尺度で、極めて親^{しん}とされるものと、極めて疎^{しん}と判定されるものと、そのような典型的な母や子に関し、個別面接を試みたり、教師よりの資料を得ることなども求められるであろう。

さらに、親近感情は子の側からと母の側からと得られているが、これをたとえばそれぞれの中央値によって2分するならば、(1)母—親^{しん}；子—親^{しん} (2)母—親^{しん}；子—疎 (3)母—疎；子—親^{しん} (4)母—疎；子—疎の4類型群に分つことができる。そのそれぞれと、先述の母—子の態度の各指標との関連なども求められよう。第1の類型群、すなわち母—子ともに親近感情の高い群において、他の類型群よりも、各指標との相関が果たして高いであろうか。そのようなこともまた、今後追究されるべき課題のひとつであろう。

それから、設問の表現は果たして真に適切であったろうか。本研究において採ったような、間接的表現が、母—子の真実に近い応答をひき出すのに資するところがあったか、それとも、直截的な表現に比し、設問の意図がかえって曖昧となるところはなかったか。それらの点もまた、吟味されなければならない。

それにも増して、記入にあたって、中学2年女子というような思春期にある被験者が、どれだけ彼らの主観的真実を表明したであろうか。もちろん、趣意を説明し、その点を強く要望したのではあった。また一般の生徒は、着実に応答しているように観察され、そう判断されてはいるが。また、

母親の記入は、趣意を説明した依頼状を附して家庭において、子どもとは全く独立してなされることが期待された。しかし、それを、たとえば、父兄会の席上で記入する場合のように、筆者らが意図的に統制することはできなかった。このことは、フィードバックのことを顧慮するならば、大きな問題たりうる。

なお、ここでは態度の概念で通常考えられている、動機感情の側面は余り取り上げ得なかった。その点は、各Xならびに各Xを構成する各項目に関し、方向・程度・強度をもったものとして尺度化を行なう過程で、汲み上げていくことが要請されよう。

以上みてきたように、本研究は今後改善されるべき多くの問題を内包した予備的研究である。しかしながら、にもかかわらず、親子関係、家族関係の心理学的考察をすすめるにあたっての、ひとつの新しいアプローチであるということではできよう。今後はさらに序で触れた、親の側の先行の要因と、子の側のその結果としておこる要因の問題を考えるにあたって、このような枠組を導入するための方法が探られてもよいのではなかろうか。それは具体的には次のようなことを意味する。本論文でとりあげられた母一子のXをめぐるの体系ではそのXは、母一子のいずれにとっても重要で中心的で、関連性のあると考えられる子どもの行動に関するそれであった。そのようなXは、子どもの成長発達に伴なって当然変容していく面もあるだろう。その間の事情は、別稿でのXに関する分析からも、ある程度うかがわれるところである。ところが、そのようなXではなくして、かえって、従来の親一子関係の研究でよく取り上げられている、依存性なり攻撃性なり、あるいは協同一競争などをXとして選出し、子どものそれぞれの発達段階に応じた表現形態にふさわしい形でそれらの具体的項目を吟味し作成していくのである。ところで、そのようなXは、年齢に応じて表現形態に関しては異なるにもせよ、そのような行動特性それ自体は、年齢いかににかかわらず、かなり一般的に認められるはずのものである。そして、そのようなXを問題とするならば、当然子どもの行動特性の形成過程

が考えられなければならないであろう。したがって、縦断的方法 (longitudinal approach) であれ、横断的方法 (cross-sectional approach) によるのであれ、とにかくも、そのようなXは一方では発達的にみていくべきであろう。それとともに、他方一定時点での、その子どもの行動特性をめぐっての、母—子、ないしは親—子の体制化された体系をもおさえていくようにする。そして、その体系の中で、異なるX (たとえば、攻撃性 (X') と依存性 (X'')) 間……) での、母—子の態度の一貫性、また、同一のXに関しての、母—子の態度の安定性ないしは変容可能性などを検討していくのである。

本論文で扱った研究自体は、極めて限られた、一定時点での、いくつかの領域での子どもの具体的行動をXとした、母—子の態度の認知的側面の一端をみたものでしかない。しかしながら、それは、子どものある行動特性の形成過程と、それをめぐっての母—子、ないしは親—子の体制化された体系との接点を見ていくための研究への端緒となり、導入点となる潜在的可能性はあるのではなからうか。このようにみてるならば、「家族関係と人格形成」の課題とは一見必ずしも直接的には深い関連がないかにもみえる、この「均衡理論の適用による母—子の態度に関する研究」が、実は、深くその課題とかかわっているのだということができよう。筆者らはそう信じ、そのような方面への展開を今後期するものである。

— 。 — 。 — 。 —

稿を終わるに当たり、終始ご寛容をもってご懇篤にご指導を賜わった、代表研究者・依田新教授をはじめ、被験者に関して多大のご配慮を忝けなうした、日本女子大学附属中学校主事宮本美沙子先生、前・小金井東中学校校長石橋政男先生、現・田無小学校増沢喜美夫先生、三鷹市立第1小学校校内田精一先生、杉並区立高井戸中学校花園幸雄先生、また同年輩の子どもの母親として極めて有益な示唆に富む助言を与えられた伊藤節氏、研究に協力して下さった多数の生徒・母親の皆様に、心からの謝意を表す。

参考文献

- 青木邦子(1966) 接触様式からみた親子の親近感情. 教育心理学研究, 14, 88—102.
- Baldwin, A. L. (1967) *Theories of child development*. New York: Wiley.
- Becker, W. C. (1964) Consequences of different kinds of parental discipline. In M. L. Hoffman & Lois W. Hoffman (Eds.) *Review of child development research*. Vol. 1. New York: Russell Sage Foundation, Pp. 169—208.
- Brown, R. (1962) Models of attitude change. In R. Brown *et al.* *New directions in psychology*. Vol. 1. New York: Holt, Rinehart & Winston, Pp. 1—85.
- Campbell, D. T. (1957) Factors relevant to the validity of experiments in social settings. *Psychol. Bull.*, 54, 297—312.
- Campbell, D. T. & Stanley, J. C. (1963) Experimental and quasiexperimental designs for research on teaching. In N. L. Gage (Ed.) *Handbook of research on teaching*. Chicago, Ill.: Rand McNally, Pp. 171—246.
- Daw, R. W. & Gage, N. L. (1967) Effect of feedback from teachers to principals. *J. educ. Psychol.* 58, 181—188.
- Edwards, A. L. (1957) *Techniques of attitude scale construction*. New York: Appleton-Century-Crofts.
- Festinger, L. (1957) *A theory of cognitive dissonance*. Evanston, Ill.: Row, Peterson.
- 古畑和孝・鈴木百合子・田代千枝子(1968) 均衡理論の適用による母—子の態度に関する研究(第1報告). 日本心理学会第32回大会発表論文集, 465—467頁.
- Gage, N. L., Runkel, P. J. & Chatterjee, B. B. (1960) *Equilibrium theory and behavior change: An experiment in feedback from pupils to teachers*. Urbana, Ill.: Bureau of Educ. Res., Univer. of Ill.
- Gage, N. L., Runkel, P. J. & Chatterjee, B. B. (1963) Changing teacher behavior through feedback from pupils: An application of equilibrium theory. In W. W. Charters, Jr. & N. L. Gage (Eds.) *Readings in the social psychology of education*. Boston: Allyn & Bacon, Pp. 173—181.
- Heider, F. (1946) Attitudes and cognitive organization. *J. Psychol.* 21, 107—112.
- Heider, F. (1958) *The psychology of interpersonal relations*. New York: Wiley.
- Medinnus, G. R. (Ed.) (1967) *Readings in the psychology of parent-child*

- relations*. New York: Wiley.
- Newcomb, T. M. (1953) An approach to the study of communicative acts. *Psychol. Rev.*, 60, 393—404.
- Newcomb, T. M. (1959) Individual systems of orientation. In S. Koch (Ed.) *Psychology: A study of a science*. Study I. Conceptual and systematic. Vol. 3. Foundations of the persons and the social contexts. New York: McGraw-Hill, Pp. 384—422.
- Newcomb, T. M. (1960) Varieties of interpersonal attraction. In D. Cartwright & A. Zander (Eds.) *Group dynamics*. 2nd ed., Evanston, Ill.: Row, Peterson, Pp. 104—119.
- Newcomb, T. M. (1961) *The acquaintance process*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Newcomb, T. M. (1963) Stabilities underlying in interpersonal attraction. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 66, 376—386.
- Newcomb, T. M., Turner, R. H. & Converse, P. E. (1965) *Social psychology: The study of human interaction*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Osgood, C. E. & Tannenbaum, P. H. (1955) The principle of congruity in the prediction of attitude change. *Psychol. Rev.*, 62, 42—55.
- Osgood, C. E. (1960) Cognitive dynamics in the conduct of human affairs. *Publ. Opin. Quart.*, 24, 341—365.
- Shaw, M. E. & Wright, J. W. (1967) *Scales for the measurement of attitudes*. New York: McGraw-Hill.
- Tagiuri, R. (1952) Relational analysis: An extension of sociometric method with emphasis upon social perception. *Sociometry*, 15, 91—104.
- Tagiuri, R. (1958) Social preference and its perception. In R. Tagiuri & L. Petrullo. (Eds.) *Person perception and interpersonal behavior*. Stanford, Calif.: Stanford Univer. Press, Pp. 316—336.
- Yarrow, Marian R. (1963) Problems of methods in parent-child research. *Child Develpm.*, 34, 215—226.
- 依田新 (編) (1958) 家族の心理. 東京: 培風館.
- Zajonc, R. B. (1960) The concept of balance, congruity and dissonance. *Publ. Opin. Quart.*, 24, 280—296.
- Zajonc, R. B. (1968) Cognitive theories in social psychology. In G. Lindzey & E. Aronson (Eds.) *The handbook of social psychology*. Vol. 1. Reading, Mass.: Addison Wesley, Pp. 320—411.

なお本研究は頭書の5名による共同研究であるが、本稿執筆の責任は古畑にある。この中、松野（東）は予備調査の段階まで参加した。また、この他に、本学大学院岡田朋子の協力があった。つぎの別稿の執筆者は先述のとおり鈴木である。

予備調査の検討：母—子の共通の関心事および母—子の態度・意見の類似と相違

調査目的：この予備調査の目的は、後に行われる本調査に用いる質問項目の作成に必要な情報をうることであるが、次の二点に焦点をあてて、調査対象である母子に質問紙を配布し、自由記述の回答を得た。質問の第一の焦点は、母子が日常関心をもつ、共通の重要な態度の対象が何であるかを知ることである。これはNewcombの均衡理論でいうならば、子A及び母Bの双方が、それぞれある態度を抱く共通の対象Xをめぐる形づくるA—B—X体系が、均衡を保とうとするような、そういうXを探し出すことであり、それは母子にとって共に関連の深く、且つ重要な態度領域であることが必要である。質問の第二の焦点は、このような対象に対する母子の態度の、類似、相違をめぐる、母—子間の感情がどのようなものであるのか、その実際のありさまを知ることである。これが果して均衡理論を支持するような関係にあるのか、おおよそのさぐりを入れてみる必要があるだし、また母—子関係と一口に言っても、母と子の年令の違いや立場の相違は同じ、態度、意見の類似、相違という現象に対しても、子側からおよび母側からよせる感情の性質を異ったものに行っていることが想像される。そうした母—子の対人関係の特質を明らかにしておくことは、母—子を一對の人間関係とみなして、均衡理論の適用可能性を検討しようとする試みの出発点にあたって、ふむべき第一歩であると思われる。したがって、この調査は、仮説検証の目的をもつ本調査に必要な情報を獲得するための予備調査であり、また母—子関係の特質についての質的な情報を得ることを期待している。

調査方法：8問からなる自由回答形式の質問紙（母と子それぞれにふさわしい表現形式で書かれている）を配布し、学級で児童に記入させ、また、児童各自に母親の分を持ち帰らせ、家庭で母親に記入させたうえで児童に持参させ、学級担任の手を通して回収した。質問紙の形式、内容については本文のⅢ—2を参照されたい。

被験者は、①都内某公立小学校5年生91名（男56名、女35名）およびその母親87名（男児の母55名、女児の母31名）、②都下某公立中学校2年生82名（男43名、女39名）およびその母親78名（男児の母36名、女児の母42名）である。この調査は、1966年11月下旬行われた。

調査結果ならびに考察：質問紙の回答内容を、筆者らが検討した結果、次の10のカテゴリーに分類できるとの合意に達した。A. 友達（遊びを含む）B. 勉強（学校のことを含む）C. 家族、D. 家庭教育、E. 金銭、物、F. 趣味、G. 子どもの自己、H. テレビと読書、I. 社会問題、J. 雑の10のカテゴリーである。まず、母子それぞれ、および共通に関心のあつる重要な態度領域を明らかにするため、第1問から第3問までの回答（第1問、最近の関心事、第2問、最近の重大関心事、第3問、母一子間の話題）中にあらわれた態度の対象について明記してある記述を、この10のカテゴリーに分類した。第1問～第3問における、被験者の記述のうち各カテゴリーにおける母および子の反応実数ならびに、これをその質問に対する反応総数の百分率で示したのが表1—Aである。各質問項目に対する回答状況は、表1—Bに示してある。

次に、母子の態度、意見の類似および相違と、母一子間の感情状態の関係を明らかにするため、第4問～第8問（第4問、母子の態度の類似する場合、第5問、母子の態度の相違する場合、第6問、母子げんかの原因、第7問、不満な母子の態度の相違、第8問、不満でない母子の態度の相違）の回答にあらわれた態度の対象について明記してある記述を、前記の10のカテゴリーに分類し、質問項目ごとに、各カテゴリーの頻数と、これをそ

表1-A 態度の対象による母子の記述の分類(質問項目1-3)

項目	被験者	A 友達 (遊び)	B 勉強 (学校)	C 家族	D 家庭 教育	E 金銭 物	F 趣味	G 自己	H TV 読書	I 社会 問題	J 雑	反応計	
(1) 最近の 関心事	子	小	14 (4.3)	100 (30.7)	15 (4.5)	12 (3.6)	3 (0.9)	127 (38.5)	4 (1.2)	54 (16.4)	0 (0)	1 (0.3)	330 (100)
		中	42 (23.6)	34 (19.1)	14 (7.9)	2 (1.1)	0 (0)	26 (4.1)	45 (25.3)	3 (1.7)	8 (4.5)	4 (2.2)	178 (100)
	母	小	5 (2.5)	38 (18.7)	10 (4.9)	27 (13.3)	3 (1.0)	6 (3.0)	36 (17.7)	9 (4.4)	69 (34.0)	0 (0)	203 (100)
		中	5 (3.7)	28 (20.0)	9 (6.4)	11 (7.9)	2 (1.4)	2 (2.4)	31 (22.1)	2 (1.4)	50 (35.7)	0 (0)	140 (100)
(2) 重大 関心事	子	小	12 (12.6)	32 (33.7)	5 (5.3)	3 (3.2)	2 (2.1)	31 (32.6)	5 (5.3)	3 (3.2)	1 (1.9)	1 (1.9)	45 (100)
		中	21 (23.1)	15 (16.5)	3 (3.3)	1 (1.1)	1 (1.1)	2 (2.2)	44 (48.3)	0 (0)	2 (2.2)	2 (2.2)	91 (100)
	母	小	0 (0)	8 (17.0)	3 (6.4)	14 (29.8)	1 (2.1)	0 (0)	21 (44.7)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	47 (100)
		中	4 (6.2)	10 (15.4)	2 (3.1)	4 (6.2)	0 (0)	1 (1.5)	32 (49.2)	1 (1.5)	11 (16.9)	0 (0)	65 (100)
(3) 母子間 の話題	子	小	28 (20.7)	72 (53.3)	4 (3.0)	7 (5.2)	8 (6.0)	7 (5.2)	7 (5.2)	1 (0.7)	1 (0.7)	0 (0)	135 (100)
		中	18 (11.0)	45 (27.5)	3 (1.8)	23 (14.0)	4 (2.4)	11 (6.7)	37 (22.6)	13 (7.9)	10 (6.1)	0 (0)	164 (100)
	母	小	29 (14.4)	73 (36.3)	5 (2.5)	42 (20.9)	7 (3.5)	17 (8.5)	13 (6.5)	9 (4.4)	6 (3.0)	0 (0)	201 (100)
		中	18 (14.9)	40 (33.0)	2 (1.7)	17 (14.0)	2 (1.7)	2 (1.7)	27 (22.3)	9 (7.4)	4 (3.3)	0 (0)	121 (100)

表の数字は各質問項目における被験者の記述のうち、各カテゴリーにおける反応の数を示し、()内の数字は、その質問項目における反応合計に対するその反応数の百分率を示す。

の質問に対する反応総数の百分率で示したのが表2-Aである。表2-Aの質問項目に対する回答状況は表2-Bに示されている。

表1-Aおよび、表2-Aに示された百分率を、母と子(左図または右図)また小学生と中学生(黒棒対白棒)で比較可能なように図示したのが、

表 1—B 質問項目 1—3 の回答状況

項目	被験者		回 答				無回答	N
			肯定(記述あり)	肯定(記述なし)	否	定		
(1) 最近の関心事	子	小	91	0	0	0	91	
		中	81	0	0	1	82	
	母	小	83	0	2	2	87	
		中	74	0	2	2	87	
(2) 重大関心事	子	小	88	1	1	1	91	
		中	77	0	2	3	82	
	母	小	74	1	5	7	87	
		中	70	0	0	8	78	
(3) 母子間の話題	子	小	87	1	3	0	91	
		中	81	1	0	0	82	
	母	小	83	0	2	2	87	
		中	67	1	2	8	78	

表の数字は人数を示す。

肯定は、質問事項を事実として認めたもので、否定は例えば

(2)の質問に対し、「特に重大な関心はありません」と答え、質問事項を否定したものをさす。

Fig. 1~3 および, Fig. 4~8 である。Fig. 1~8 の棒グラフのパターンを, 母と子, 小学生と中学生で比較することによって, 各カテゴリーにおける分布の傾向の異同を知ることができるので, これらの図を見ながら, 考察を進めて行きたい。

Fig. 1 を一見してわかるように, 母と子の最近の関心の対象にはくい違いがある。(グラフが対象形を示さない) 母の主たる関心の対象は, 小, 中学生の母とも社会問題(I)であるが, 子どもでは, 小学生で趣味(F), 中学生で自己(G)になっている。母親の関心の第1位にあげられている社会問題(I)の内容は, a. 非行, b. 交通事故, c. 政治不信, 物価高,

表2-A 態度の対象による母子の記述の分類(質問項目4-8)

項目	被験者	A 友達 (遊び)	B 勉強 (学校)	C 家族	D 家庭 教育	E 金 物	F 趣 味	G 自 己	H TV 読 書	I 社 会 題	J 雑	反応計	
(4) 態度の類似	子	小	5 (7.6)	17 (25.7)	4 (6.1)	5 (7.6)	5 (7.6)	21 (31.8)	2 (3.0)	5 (7.6)	2 (3.0)	0 (0)	66 (100)
		中	8 (12.9)	7 (11.3)	14 (22.6)	6 (9.6)	1 (1.6)	16 (25.8)	4 (6.5)	4 (6.5)	2 (3.2)	0 (0)	62 (100)
	母	小	3 (4.8)	4 (6.5)	0 (0)	13 (21.0)	1 (1.6)	11 (17.7)	24 (38.7)	6 (9.7)	0 (0)	0 (0)	62 (100)
		中	2 (6.5)	1 (3.2)	0 (0)	7 (22.5)	1 (3.2)	2 (6.5)	15 (48.4)	1 (3.2)	2 (6.5)	0 (0)	31 (100)
(5) 態度の相違	子	小	2 (3.1)	20 (30.8)	13 (20.0)	6 (9.2)	9 (13.8)	8 (12.3)	2 (3.1)	3 (4.6)	0 (0)	2 (3.1)	65 (100)
		中	3 (4.6)	3 (4.6)	2 (3.1)	9 (13.8)	11 (17.0)	15 (23.1)	14 (21.5)	3 (4.6)	0 (0)	5 (7.7)	65 (100)
	母	小	0 (0)	11 (29.7)	1 (2.7)	7 (18.9)	2 (5.4)	0 (0)	11 (29.8)	4 (10.8)	0 (0)	1 (2.7)	37 (100)
		中	2 (6.6)	1 (3.3)	1 (3.3)	4 (13.3)	1 (3.3)	5 (16.8)	15 (50.1)	0 (0)	0 (0)	1 (3.3)	30 (100)
(6) 母子げんかの原因	子	小	5 (8.8)	8 (14.0)	6 (10.5)	13 (22.8)	5 (8.8)	10 (17.5)	7 (12.3)	2 (3.5)	0 (0)	1 (1.8)	57 (100)
		中	1 (1.6)	5 (8.1)	10 (16.1)	20 (32.2)	5 (8.1)	10 (16.1)	4 (6.5)	1 (1.6)	0 (0)	6 (9.7)	62 (100)
	母	小	1 (3.6)	1 (3.6)	1 (3.6)	15 (53.4)	0 (0)	1 (3.6)	7 (25.0)	1 (3.6)	0 (0)	1 (3.6)	28 (100)
		中	0 (0)	0 (0)	4 (11.1)	12 (33.3)	2 (5.6)	6 (16.7)	8 (22.2)	1 (2.8)	0 (0)	3 (8.3)	36 (100)
(7) 不満な態度の相違	子	小	10 (14.7)	13 (19.1)	12 (17.6)	15 (22.1)	7 (10.3)	7 (10.3)	1 (1.5)	3 (4.4)	0 (0)	0 (0)	68 (100)
		中	6 (9.6)	10 (15.9)	10 (15.9)	16 (25.4)	4 (6.3)	10 (15.9)	5 (7.9)	2 (3.2)	0 (0)	0 (0)	63 (100)
	母	小	1 (3.0)	8 (24.4)	2 (6.0)	0 (0)	1 (3.0)	3 (9.1)	17 (51.5)	1 (3.0)	0 (0)	0 (0)	33 (100)
		中	0 (0)	0 (0)	3 (25.0)	0 (0)	0 (0)	1 (8.3)	6 (50.0)	2 (16.7)	0 (0)	0 (0)	12 (100)
(8) 不満でない態度の相違	子	小	4 (8.5)	12 (25.5)	3 (6.4)	8 (17.0)	9 (19.1)	7 (14.9)	2 (4.3)	2 (4.3)	0 (0)	0 (0)	47 (100)
		中	1 (2.8)	10 (28.0)	1 (2.8)	6 (16.6)	1 (2.8)	7 (19.4)	6 (16.6)	4 (11.0)	0 (0)	0 (0)	36 (100)
	母	小	1 (5.0)	2 (10.0)	0 (0)	2 (10.0)	1 (5.0)	1 (5.0)	10 (50.0)	3 (15.0)	0 (0)	0 (0)	20 (100)
		中	2 (16.7)	3 (25.0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (25.0)	3 (25.0)	1 (8.3)	0 (0)	0 (0)	12 (100)

表の数字は各質問項目における被験者の記述のうち、各カテゴリーにおける反応の数を示し、()内の数字は、その質問項目における反応合計に対するその反応数の百分率を示す。

表 2-B 質問項目 4-8 の回答状況

項目	被験者		回 答			無回答	N
			肯定(記述あり)	肯定(記述なし)	否 定		
(4) 態度の類似	子	小	78	2	4	7	91
		中	74	0	6	2	82
	母	小	56	4	5	22	87
		中	44	3	3	28	78
(5) 態度の相違	子	小	73	0	6	12	91
		中	69	2	5	6	82
	母	小	43	3	17	24	87
		中	30	2	11	35	78
(6) けんかの原因	子	小	76	0	12	3	91
		中	75	0	5	2	82
	母	小	59	0	15	13	87
		中	44	1	20	13	78
(7) 不満な態度の相違	子	小	68	0	18	5	91
		中	65	1	9	7	82
	母	小	41	1	23	22	87
		中	23	2	21	32	78
(8) 不満でない態度の相違	子	小	65	2	13	11	91
		中	64	2	9	7	82
	母	小	41	4	11	31	87
		中	29	2	9	38	78

表の数字は人数を示す。

肯定は、質問事項を事実として認めたもので、否定は、例えば(6)の質問に対し「けんかはしません」と答え、質問事項を否定したものをさす。

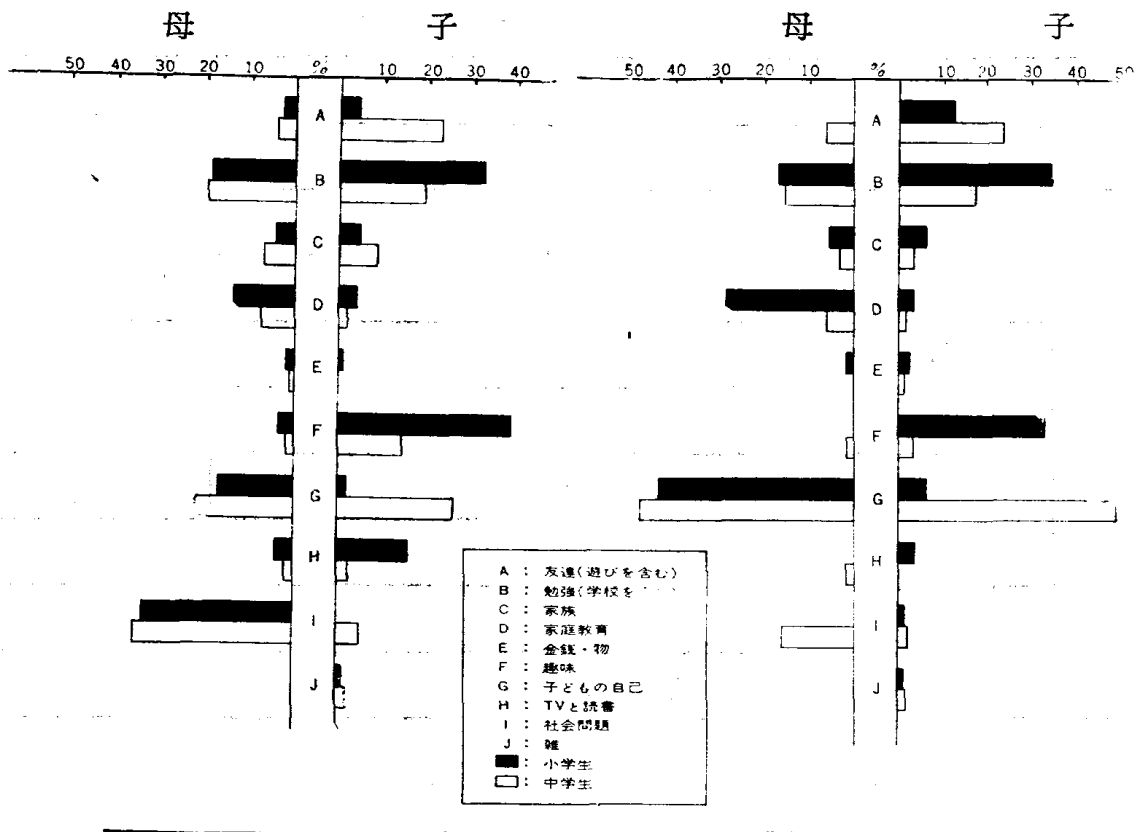


Fig. 1 最近の関心事について
の母子の記述の分類

Fig. 2 重大関心事について
の母子の記述の分類

d. 世界平和，ベトナム問題，住宅問題などである。小学生の第1位にあげられている趣味（F）の内容は，a. 趣味（釣，しょうぎ，トランプ等の娯楽，野球，卓球，バレーボール等のスポーツ，笛，ピアノ，レコード等の音楽，自動車，ローラースケート等の乗物，切手その他のしゅう集，亀，虫，鳥，犬等生物の飼育，および天文観測）b. 服装，c. 食物の好み等である。また中学生で第1位にあげられた自己（G）の内容は，子どもの自己に関するものであって，a. 体および性格，b. 生き方，c. 将来，d. 進学を含んでいる。

次に，母子の最近の関心事のうち，最も重大問題と思うものを問うた第2問の結果であるが，母では，小，中学生の母とも，子どもの自己を重大視する考えが高く，子どもでは，中学生で自己（G），小学生で勉強（B）が1位になっている。図中，Gの黒棒（小学生）と白棒（中学生）の長さを比較すると明らかなように，ここにも中学生の自己に対する重大視の増

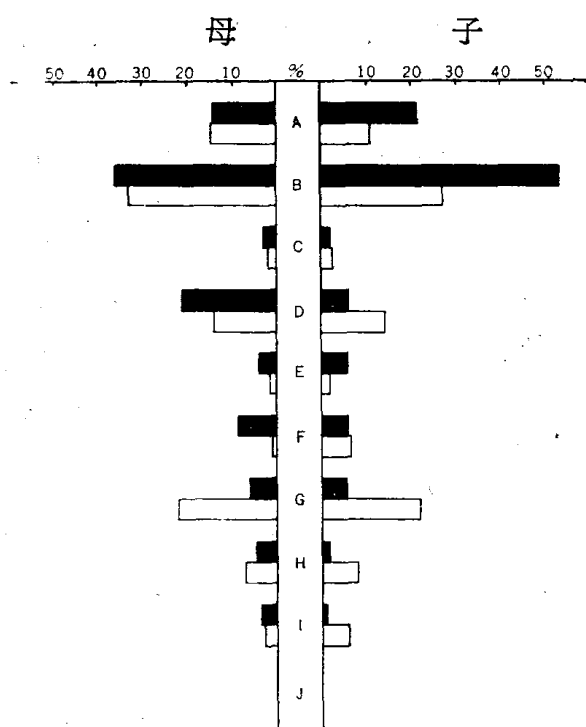


Fig. 3 母子間の話題についての
の母子の記述の分類

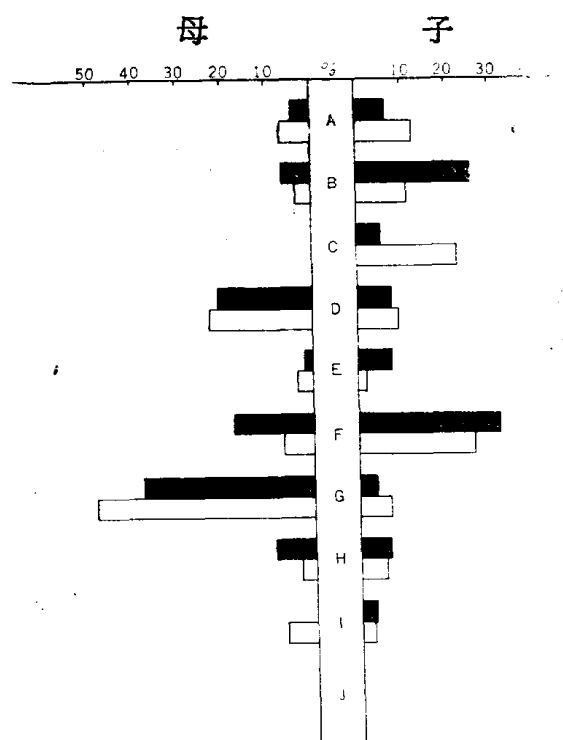


Fig. 4 態度の類似についての
母子の記述の分類

加がうかがわれる。

第1問と、第2問は類似した質問項目であるが、第1問で最近の関心事、第2問で最近の関心のうちの重大問題を問い直されると、母親では1位が、社会問題（I）から子どもの自己（G）に移り、小学生では趣味（F）から勉強（B）に変わった点、設問の仕方による反応の変化として注目されよう。

Fig. 3 は母子間の話題をカテゴリー別に分類し、頻度の%で示したものであるが、図を一見して明らかのように、棒グラフが、母と子で、ほぼ対象形を示している。一般に、会話の話題は、本人にとって関心があるばかりでなく話し手、聞き手双方に関連があり、相手に理解されるようなトピックスが選ばれるのが普通であるから、母と子で、話題としてあげられるカテゴリーの頻度の順位が類似してくるのは当然とも言えよう。さて、母、子とも話題の第1位となっている勉強の内容であるが、a. 勉強（や

り方、時間、成績) b. 学科, c. 学校の出来事, d. クラブ活動, e. 塾, 課外等である。

第1問から第3問の結果の考察を通して気づくことは、子どもの小学生から中学生への発達段階を反映して、関心の対象に推移がみられることであり、母親もまた、これを反映していることである。表1—Aをみて明らかのように、子どもの自己(G)に関して、中学生は小学生より関心の度合(%)が高く、また中学生の母の方が小学生の母より関心の度合(%)が高い。(3問中3問で)。これと対比的なのは、母親の側からなされる家庭教育(D)に対する関心であって、小学生の母は、中学生の母よりも家庭教育Dに対する関心の度合(%)が高く(3問中3問で)、子どももだいたいこの傾向をふんでいる。

さて、本調査の目的のため、母子にとって関連が深く、かつそれぞれにとって重大な態度領域を選択する必要があるのだが、その一つの方法として、第1問から第3問における母子の反応を、%の高い順に順位づけを行い、3問の平均的順位の高いカテゴリーから、順に選択することが可能であろう。表I—Aの10のカテゴリーについて平均的順位を求め、その高い方から並べると、1. 勉強(B), 2. 自己(G), 3. 友達(A), 4. 家庭教育(D), 5. 趣味(F), 6. 家族(C), 7. 社会問題(I), 8. TVと読書(H), 9. 金銭, 物(E), 10. 雑(T)となる。社会問題(I)は、母親にとっては関心の高い対象であるが、小学生にとっての関心は低く、このため平均的順位は低くなっている。

本調査における質問項目数の制限を考慮して、H. Eのカテゴリーは、Fの中に吸収して考え、I. J.は省くこととした。結局選択された態度領域は、1. 勉強, 2. 自己, 3. 友達, 4. 家庭教育(しつけ), 5. 趣味, 6. 家族(兄弟)の6領域である。

次に第4問～第8問の結果の分析から、母子の態度の類似、相違をめぐって、母—子間の関係がどのようなものであるのか、そのありさまを知りたいのであるが、母—子間でどのようなカテゴリーにおいて、態度の類似する頻

度が多いが、その%が Fig. 4 に図示されている。

母親は、小、中学生の母とも、子どもの自己 (G) に自分との類似を感じることが最も多いが、母親のいう自己 (G) の内容は、a. 子どもの性格、b. 子どもの生活態度で、自分のそれとの類似を感じている。次に中学生女兒の母の文例を示すと、

(子どもは) 将来のことで、女でも自分に合った技術なり才能をのばして、社会人として立派に生活できるような人になりたいと思っている点、母として嬉しく思った。

とあり、子どもの理想像と、自分の子どもにいただく理想像の一致を喜ぶ母親の気持が記されている。一方子どもでは、小、中学生とも、趣味 (F) に母との類似を感じることが最も多くなっている。その趣味 (F) の内容であるが、a. 色、b. 食物、c. 文学の鑑賞における趣味の類似であって、小学生男児の食物に関する文例をあげると、

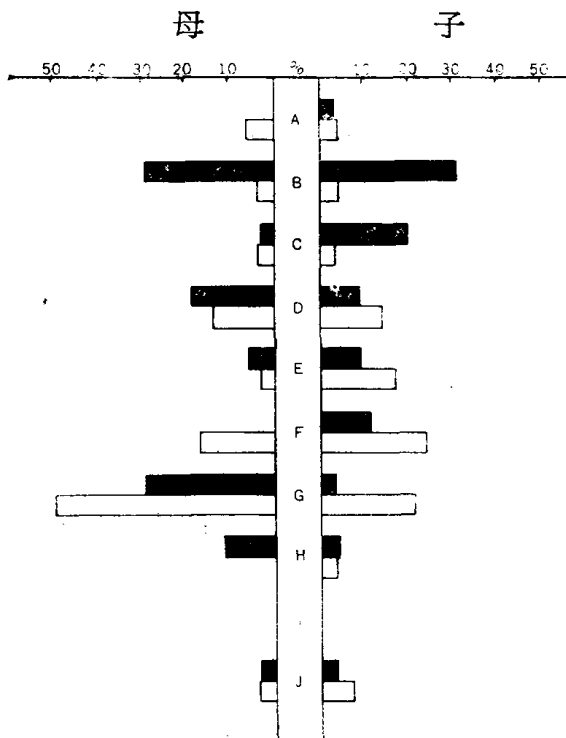


Fig. 5 態度の相違についての母子の記述の分類

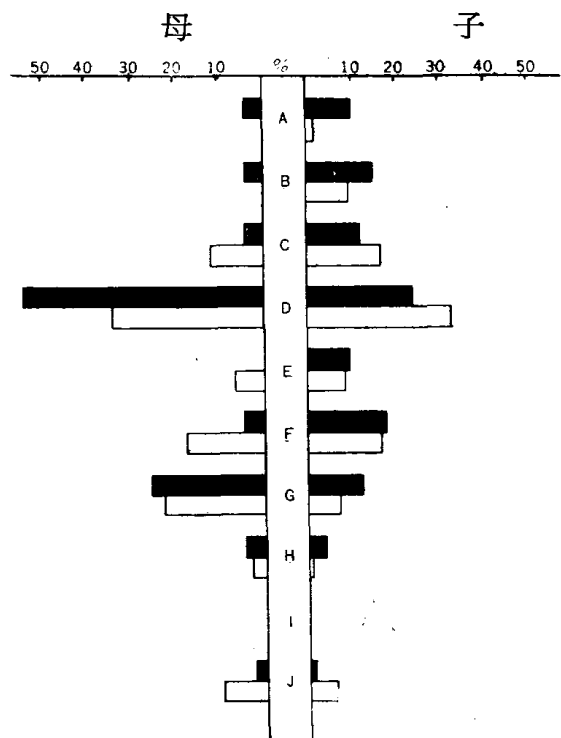


Fig. 6 母子げんかの原因についての母子の記述の分類

夜ごはんのおかずで、ぼくがカレーライスというと、おかあさんもそう
 しましょうという。よかったとかんじる。

とある。子どもの嗜好に、母が理解を示し、子どもの喜んでいる様子がかがわれる。

Fig. 5 は、母—子間で、態度、意見の相違する場合、どのようなカテゴリーで、どのような頻度の%でみられるかを図示しているが、図を一見して明らかなように、黒棒（小学生）と白棒（中学生）の長さに差がある。これは、子どもの側でも、母親の側でも等しく言えることである。差の最も顕著なのは、自己（G）と、勉強（B）のカテゴリーにおいてであるが、その内容を調べると、自己（G）では、a. 子どもの性格、および行動特性、b. 物の考え方、c. 将来のことに関して、中学生は小学生よりも、また中学生の母は、小学生の母よりも、母—子間のくい違いを感じる頻度の割合の多いことがわかる。勉強（B）の内容に関しては、Fig. 3 の考察のところでも既に述べたので省くが、自己（G）に関する場合とは逆に小学生は中学生よりも、また、小学生の母は中学生の母よりも、勉強（B）に関して、母—子間の態度、意見のくい違いを感じる頻度の割合が多い。いま自己（G）に関する文例を、男子中学生から拾ってみると、

現在流行しているものについて、（母に）意見を聞くと、昔流の話をして僕をなっとくさせようとする。せっかくよそいきの言葉をつかったのに、頭にくる。

のように、当世流行の品を母に買わせようとして、母の反対意見にあい、目的を果せなかった子どもの失望が、おどけて描かれている。また、自己（G）に関する、女子中学生の母の文例を示すと、

子どもは、小川未明の童話集を読んでも、最後まで答が出ないと、満足しない。余韻を楽しむ余裕がない。

また、勉強（B）に関する小学生女兒の母の文例には、
 家での勉強のこと、（子どもは）今は昔の勉強の仕方と違う、ママはだめだとはっきりいう。

があり、ドライな現代っ子気質を前に、自身の気質とのずれを感じている母の姿がある。子どもの側の勉強（B）に関する小学生男児の文例には、

母は塾に行きなさいというので、僕はいつもいやだと思う。

があり、母の勉強の強制に対して、小学生の不平、不満の気持をあらわしている。

Fig. 6 は、母子げんかの原因を、カテゴリー別に、その頻度の%で図示したものであるが、母親の側では、小、中学生の母とも（特に小学生の母は）子どもとのげんかの原因として、家庭教育（D）を圧倒的に多くあげている。これにくらべ、子どもの側では、D以外のいろいろのカテゴリーに、母とのげんかの原因をふりわけている。家庭教育（D）の内容は大別して、a. 家事の手伝い、b. しつけ、がある。小学生男児の母の文例を示すと、

遊びに行く時間と、帰宅の時間でげんか、また、小学生女児の母には、（子どもは）依頼心が強く何でも頼る。ブツブツ言うが言いながらでもやらせる。

といった叙述がある。母親がしつけを守らせようとして争い、子どもとげんかをする例といえよう。しかし、母親の中には、これをげんかとして受け取らないものもかなりおり、表2-Bの（b）げんかの原因の母親の反応では、質問紙の配布を受けた165名の母親中、35名（21%）が、げんかはしませんと否定している。

母一子間の、態度、意見に相違があって、不満に感じられる場合は、Fig. 7 に図示されているが、ここでも母親の側では、小、中学生の母とも、集中的に、自己（G）に関して、子どもとのくい違いの不満をのべている。母親の記述の詳細は、附録の文例でみて頂きたいが、その多くの叙述は、子どもの性格、考え方に対する不満である。家庭教育（D）に関して、母親の側に、子どもとのくい違いによる不満がまったくないのは、母親自身がしつけをし、子どもを従わせるためであると思われる。また母親の中には、子どもと意見がくい違わない、およびくい違っても不満でない

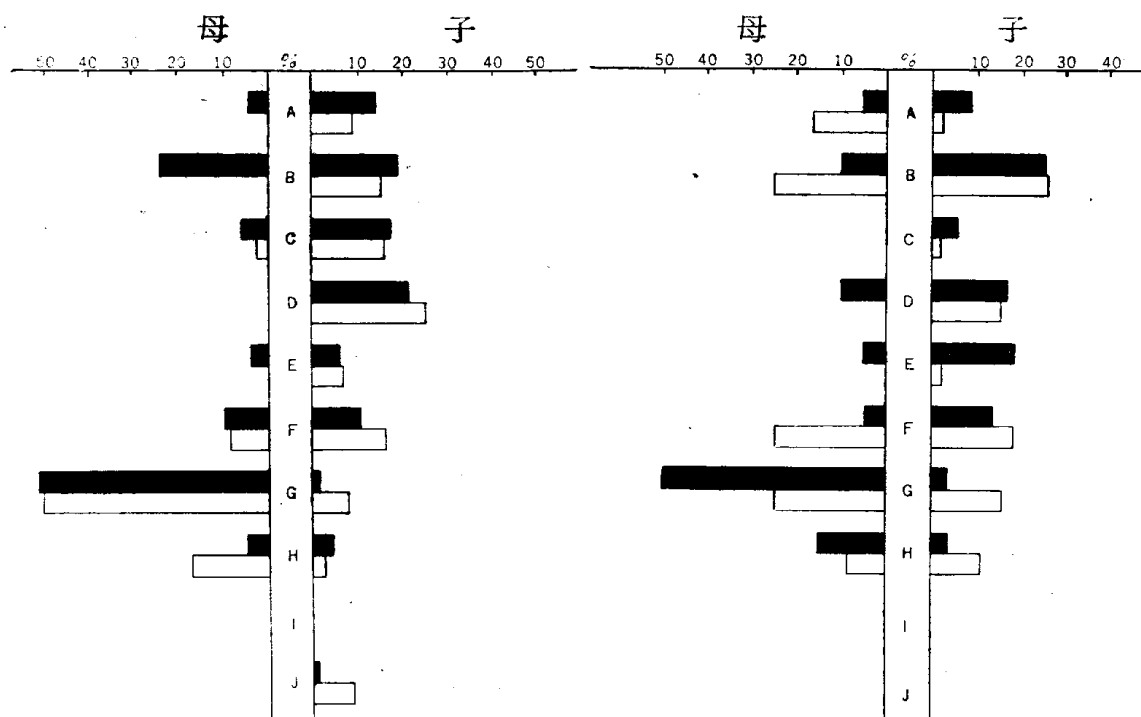


Fig. 7 不満な態度の相違についての母子の記述の分類

Fig. 8 不満でない態度の相違についての母子の記述の分類

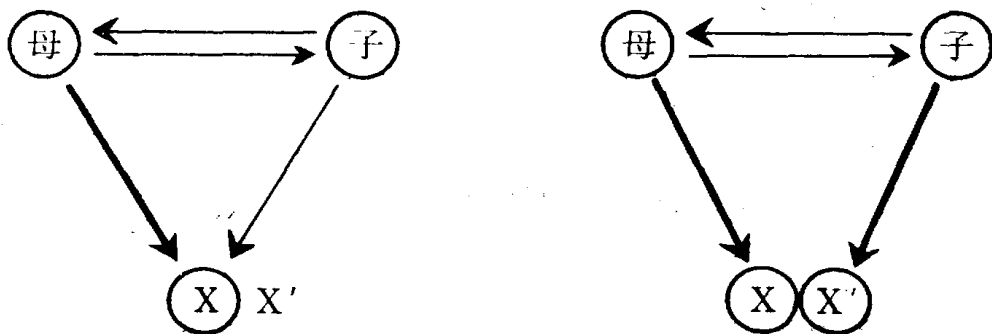
と答えたものが合わせて44人いた。子どもの側では、母との態度のくい違いを不満に思うことは、種々のカテゴリーにわたっているが、記述の詳細は、附録の文例を見て頂くこととして、家族のうち、母親の兄弟の取り扱いに関する不公平を不満に思う記述をのぞいて、すべて、母親による子どもの自由の制限、行動の強制に対する、不満、反撥の例である。

Fig. 8 は母—子間の態度の相違に不満が感じられない場合であるが、表2—Bから明らかなように、第4問以降、内容を記述した回答者の数が次第に減りはじめたが、第8問に至り、特に母親の側で激減している。これは類似した質問が重なるので、記述の内容を、既に前の項目で書き尽してしまっていること、また質問にあきたための現象と思われる。ところで、内容を記述した70名の母親の回答のうち、態度の対象について記述した32の反応を分析した結果その41%は子どもの自己(G)についてのくい違いを不満でないとして述べている。これは第7問不満な母子の態度の相違の

回答で、同じ自己 (G) のカテゴリーについて、母親の全反応数 (45) の 50% の割合で、母親が不満を述べている現象と矛盾するようであるが、母親は子どもの考え方の自由を人 (母) により、また、もの (G のカテゴリーの中でも) により認めているようだ。

以上で、Fig. 1—8 をみながら、また文例を参照としながら、第 1 問～第 8 問の結果の考察を終えたのであるが、ここで認知的均衡理論 (特に Newcomb) との関係を考え合わせながら、得られた情報をもとに、母—子という対人関係の特質について考えてみたい。

母および子は、ある態度の対象 (価値をふくむ) X に対して、それぞれ好意的、もしくは非好意的態度をもっている。Fig. 9 は、母親と小学生の子、中学生の子が、共通の対象 X をめぐって、形づくる対人関係を図式的に示したものである。母から子へ、子から母へ向けられた矢印は、それぞれに対する態度を示す。母—子は通常愛し合い相互に好意的態度をいただいている。いま仮に、X を母のいたく子どもの理想像としよう。また、X' を子どもがいたく自己の理想像としよう。X 或いは X' に対して、母および子から向けられる矢印は、母および子の X 或いは X' に対する態度を示し、その線の太さは、態度の明確さを示すものとする。母の X に対する態度は、小学校の子のそれよりも、はっきりとしている。母は、子どものしつけを通して、子どもを母のいたく子どもの理想像に近づけようとする。小学生の場合、子どもは、まだはっきりとした自己の理想像 (X') をもた



母と小学生の子
母と中学生の子
Fig. 9 母のいたく子の理想像 (X) と子のいたく自己の理想像 (X') をめぐる母子関係の図示

ないから、むしろ母を愛し、愛されたい故に、母のしつけに従い、母のい
だく理想像に、自らの行動、態度を合致させようとするかもしれない。
“おかあさんにほめられたくて勉強をする” こともあるのである。日常家
庭で、母は子どもをしつけに従わせようとするのであるが、時に子どもが
さかかってけんかとなる。子どもの側から言えば、母のしつけにより、行
動を規制され、自由を制限されることを不満に思い、これが爆発してけん
かとなる。(このことは Fig. 7 の子どもの反応についての棒グラフのパ
ターンが、Fig. 5の子どものパターンとほぼ一致することからもうかがえ
る。) 子どもが中学生になると、価値にめざめ、はっきりとした自己の理想
像(X')をえがき始める。母親は、自分のXに対する態度と、子どものそ
れにくい違いのあることに気付いたとき、不満を感ずることもあるが、ま
た子どもの成長を頼もしくさえ思う。そして母—子の立場の相違、時代の
ずれとして、子どもの考え方を、半ばあきらめ容認する。したがって、子
どもの態度との相違による不満は、必ずしも子どもとのけんかとして発散
されることはない。(このことは、Fig. 7 の母の反応についての棒グラフ
のパターンと、Fig. 6 の母親のパターンの間に、ずれがあることから
推測できる。) 母は子を教育し、子は母から教育される。母は、子どもが
年少のときには、しつけによって子どもの行動を規制するが、子どもが成
長し、母とは違った理想像をいだき始めると、母は時に不満を感じつつも、
これを容認する寛容さをもつ。一口にしていうならば、この調査を通して
みた、母—子の対人関係は、傾斜のある人間関係といえよう。この結論の
妥当性は、更に量的なデータによって確認される必要がある。ところで、
このような傾斜のある人間関係においても、なお均衡理論の適用は可能で
あろうか。それは、均衡理論に基づく仮説検証の目的をもつ本調査の結果
をまっ、明らかにされるだろう。

要約：小学校5年生91名、中学校2年生82名の児童およびその母親を対
象として、8項目からなる自由回答形式の質問紙調査を行ない、結果の分
析から、母—子が日常ともに関心をもつ、重要な態度領域として、1. 友達、

2. 勉強, 3. 兄弟, 4. 家庭教育 (しつけ), 5. 趣味, 6. (子どもの) 自己, の6領域を選択した。また回答の記述の検討から, 母一子関係が, 傾斜のある対人関係であるとの結論を得た。

(なお, 古畑は本学教育心理学助教授, 鈴木は非常勤講師, 松野(東)は元・非常勤助手, 武岡(田代)および新井は研究当時大学院学生)

附録 第7問母親の回答文例

子供とくい違って不満に思うこと

A 友達・遊び

- ・模型ばかり作る

B 勉強

- ・もっと勉強してほしい
- ・家に帰ってすぐに勉強を始めない

D 家庭教育

- ・気持ちよく家の手伝いをしてくれない。家のことは母親のみがすればよいと思っている
- ・仕事を頼んでも, 何故自分だけがやらなくてはいけないのかと不満顔をする
- ・男の子でも身のまわりのことをもっとしてもよい
- ・人への感謝の気持ちが少い
- ・言葉づかいが悪い
- ・あいさつの声が小さい

G 性格・考え方

- ・自立心に乏しい
- ・我慢が足りない
- ・好き嫌いがはっきりしていて押し通す
- ・注意しても真けんに受けとらない
- ・自己主張が強い
- ・物の考え方が, 打算的である
- ・自分のことばかり考えて家のことを考えない
- ・母親のことを古いと言う
- ・発言の多いわりに実行力に乏しい

- ・努力が足りない
- ・小さなことにこだわり，スケールが小さい
- ・親への依存性が強い
- ・へ理屈ばかり言う

H テレビ

- ・テレビをだらだら見る
- ・良いテレビ番組を見せようとしても聞き入れない

* 不満ではない

- ・時代が違うのだから仕方ない
- ・くいちがうのは当然で，むしろ頼もしい
- ・大人と子供と，意見がくいちがうのは当たり前である

母親とくい違って不満に思うこと

A 友達・遊び

- ・悪い友達と遊ぶなと頭からきめつける
- ・男子と付きあうことに反対する
- ・友達と一緒にスケートに行くことを許してくれない
- ・誰と付きあってはいけない等と言う
- ・遊びに行きたいのにいけないと言われる
- ・女らしい遊びをしると言われる

B 勉強

- ・行きたくないのに塾に行かされる
- ・先に勉強をしてから遊べと言われる
- ・もっと勉強をしると言われる
- ・クラブ活動も遊びとしか考えてくれない

C 家族

- ・兄弟げんかで，いつも自分だけがおこられる
- ・兄弟げんかくらいやってもよいと思う
- ・父に誇張していいつける
- ・自分とは関係ないことで叱られる

D 家庭教育

- ・疲れているのに用事を言いつけられる
- ・寝床で本を読むとおこられる
- ・後片づけをしないでおこられる

E 金銭，物

- ・おこづかいを自由に使えない

- ・漫画を買ってくれない
- ・欲しいものを買ってくれない

F 趣味

- ・動物を飼わせてくれない

G 自己

- ・就職進学のことです勝手なことを言う
- ・何事も早く、きれいにと言われるが、自分にはその両方はできない
- ・母はのんびりしているが、自分はせっかちである

H テレビ

- ・テレビをすぐに消してしまう
- ・テレビを見ていると、あまりいい顔をしない
- ・7時迄しかテレビを見せてもらえない

Mother-Child Attitudes toward the
Child's Behavior and Their Interpersonal
Attraction : An Application of
Equilibrium Theory (First Report)

Kazutaka Furuhashi, Yuriko Suzuki, Naoko A. Matsuno,
Chieko T. Takeoka and Hiroko Arai

The main purpose of the present study was to investigate the relationships between certain aspects of attitudinal similarity between the mother and the child, on the one hand, and their interpersonal attraction, on the other. In so doing, an attempt was made to examine the applicability of the equilibrium theory to this particular problem.

Specifically, first, the attitudinal object selected was instances of the child's behavior perceived as important and central by both the child and its mother. These instances of the behavior were itemized on the basis of an analysis of the responses to 8 open-ended questions by 170 fifth graders and seventh graders, including both male and female, and their mothers. Then, 50 items were selected from the areas of study, habits, hobbies, self, siblings and friends and children rated themselves (C-I) and how their mother would rate them (C-II) on the items. Mothers rated their child (M-I) and an ideal child (M-II) on the same 50 items. Four indices concerning attitudinal similarity between the mother and the child were obtained from these ratings. They were "assumed similarity" (as measured by the similarity of C-I to C-II), "real similarity" (as measured by the similarity of C-I to M-I), "accuracy" (the accuracy of the child's perception of the mother's responses, as measured by the similarity of C-II to M-I) and "satisfaction" (as me-

asured by the similarity of M-I to M-II). A mother-child attraction scale, consisting of 10 items, was also constructed and measures on it were obtained both from the mother's rating and the child's.

After the examination of sex differences and the developmental stability of the reponses to each item as well as of the scores of the four indices, it was decided to control these variables in the present study. Thus, finally 98 female second graders in a private junior high school in Tokyo and their mothers served as subjects.

The following hypotheses derived from the equilibrium theory were tested and substantiated.

- 1) The child's attraction to its mother would be positively related to the mother's attraction to her child.
- 2) The "assumed similarity" would be positively related to the child's attraction to its mother.
- 3) The "real similarity" would be positively related to the child's attraction to its mother as well as the mother's attraction to her child.
- 4) The "accuracy" would be positively related to the child's attraction to its mother.

The subsidiary hypothesis that there would be a positive relationship between mother-child attraction and the "satisfaction" was not substantiated by the data.

The results show the applicability of the equilibrium theory to the investigation of parent-child relationships. Some limitations of the present study as well as some promising lines of further study are also discussed.